

平成 27 年度 岡崎むかし館講座「岡崎風土記」

祭りからひもとく岡崎

記録



岡崎市立中央図書館（岡崎むかし館）

目次

第1回	岡崎の山車文化を探る（平成27年4月27日）	
1	山車とは…	1
2	岡崎の山車の今	2
	補足	1 1
	補遺 写真資料	1 2

第2回	稲の力（平成27年6月22日）	
1	日本人にとってのコメ（米）	2 5
2	悠紀斎田お田植神事	2 6
3	御田扇祭りの今	2 9
	補遺 写真資料	4 5

第3回	山里の祭り（平成27年9月28日）	
1	額田地区の環境	5 4
2	山里の祭りの実際	5 5
	補遺 写真資料	6 3

第4回	田遊び（平成28年1月25日）	
1	田遊びとは	7 3
2	田楽とは	7 4
3	山中八幡宮「デンデンガッサリ」の実際	7 4
4	瀧山寺鬼祭りの実際	7 6

	講座関連中央図書館図書資料リスト	1 0 0
--	------------------	-------

	あとがき	1 0 7
--	------	-------

第1回 岡崎の山車文化を探る

平成27年4月27日

1 山車とは・・・

(1) 山車の定義・語源は・・・

山車は、祭礼の際に曳いたり担いだりする出し物の総称。分類すると、山の形状を模したり、上に木を立てて山の象徴としたものを「山」。それらが無いものが「屋台」と分類される。

※本来の意味の残る稀有な例として、栃木県那須烏山市の「烏山の山あげ行事」(通称「山あげ祭」、国の重要無形民俗文化財 大山は幅7尺、高さ10尺以上、奥行100尺)がある。

山車の語源としては、諸説が入り交じっている。以下、幾つか紹介したい。

屋台の鉾につけた竹籠の編み残し部分を垂れ下げて出してあり、その部分を「だし」と言ったことに由来する。その他、神を招き寄せるために外に出しておくことから「出し物」とする説もある。

「山車」と書くのは当て字で、祭礼の時に、神の降りる「依代」として小さな山を作っていたものが発展し、移動可能な車となったことから当てられたと考えられる。関西では、「壇尻(だんじり)」、「山(やま)」という。

(2) 山車の名称

① 山のつくモノ

- ・ヤマ(山、山車)
- ・ヒキヤマ(曳山、曳き山)
- ・カキヤマ(舁き山、担ぎ山)
- ・ヤマホコ(山鉾)
- ・ヤマカサ(山笠)・・・九州北部

② 車のつくモノ

- ・ダンジリ(地車、台尻、壇尻、車楽、段尻)・・・関西が主
- ・サイシャ(祭車)・・・三重県桑名市
- ・オクルマ(御車)・・・知多、尾張地区

③ 笠のつくモノ

- ・カサボコ(笠鉾)・・・秩父

・オカサ（お笠）・・・和歌山県田辺市

④ 台のつくモノ

・ヤタイ（屋台・太鼓台）・・・主に長野県、静岡県、岐阜県など中部地方、および兵庫県播磨など

(3) 山車の語源および原型

① 山車の語源は？

神殿や境内の外に出す出し物であるからとする説と依代である髯籠（ひげこ）を出しているからであるという説がある。そして、山車は「出し物」全般を指し、車の字がついていることから曳山を指すことが一般的である。

② 山車の原型は？

ヤマ（山）は自然の山岳を模して造られた依代で、祭礼などで用いられる。これが山車の原型であると理解されている。

民間信仰の世界では、カミ（神）はヤマの山頂や岩や木を依代として天から降臨するという考えがあり、山上や山麓に齋場を設け祭祀が行われていた。これらの信仰対象は、山岳信仰としてあるいはヤマを神体とする神社として残っている。代表的な例では、大神神社（三輪山）などがあげられる。岡崎でも磐座（いわくら）や神木を持つ神社が見られる。

ムラが発達すると平野部においても祭祀が行われるようになり、臨時の齋場が設けられた。この時にも降臨を仰ぐために依代を立てており、これが恒久化して現在の神社が存在する。この依代の一つに、山岳を模して造られたヤマ（山、造り山、飾り山）がある。

- ・「置き山」
- ・「曳き山」
- ・「舁き山」

2 岡崎の山車の今

(1) 能見神明宮の大祭

① 大祭の歴史

この祭りの起源は、はっきりしない。しかし、江戸中期には始まったのではないかと考えられる。

・江戸時代中期（1750年頃）

「例祭六月十五日なり、山車車輛出す、氏子町中を引き渡す、童児の舞などあり、美観云わん方なし」（『参河国名勝志』より）

- ・明治10年代
神明宮の祭礼は旧6月15、16の両日と旧9月15、16日に執行
- ・明治20年代
明治20年（1887）より、春旧4月15、16日に変更。秋は変更無
- ・明治40年代
明治41年（1908）より、祭礼を新暦5月15、16日に変更。明治42年、松本町の山車（2階建て塗り仕上）が売り払われる。
- ・大正時代
大正4年（1915）、松本町では総檜白木造りの山車新造
- ・昭和初期～終戦
昭和27年（1952）、山車の引き回し16年振りに復活
- ・昭和28年～35年
能見中之切、能見北、元能見中、元能見南、松本が山車を新造
- ・昭和58年
「大年番制」から「当番制」へ移行

② 祭りの流れ

- ・会所開き（平成25年5月5日）
- ・大幟棹立て（平成25年5月5日）
- ・前日祭（平成25年5月11日）
 - ◆小屋開き 8：00～
 - ◆山車お祓い
 - ◆前日祭 10：30～
 - ◆乙女の舞
 - ◆奉納花火 19：20～
- ・大祭（平成25年5月12日）
 - ◆神輿渡御 8：00出発
 - ◆本祭 12：00～
 - ◆山車町曳 13：00～17：30
 - ◆宮入 19：20出発
- ・終祭（平成25年5月13日）
 - ◆終祭 15：00～
 - ◆小屋終い 16：00～
- ・御神酒開き（平成25年5月18日）18：30～21：00

③ 祭り運営組織

- ・古くは、祭りのすべてを1町で取り仕切る大年番制
- ・11部門に分かれて運営（氏子町ごと受け持つ）
 - ◆大年番、渡御部（次年番）、山車部（次々年番）、備品用具部、衣装部、境内

警備部、交通警備部、稚児・五色旗部、乙女舞部、余興部、厄年部

※【大年番＝総務部の役割。年間行事を取り仕切る。】

④ 各町の山車の特徴（単位：³） ※町の前の数字は、平成27年の山車の順番

1 ◆材木2丁目

長：4800 幅：2800 高：3900

大正4年新造。山車天井に「大正四年乙卯年喜日畔溪」の墨絵の龍と彩色の花鳥画が描かれる。台輪：木製（ゴマ）

2 ◆松本町

長：4500 幅：3500 高：4350

初代の山車は江戸末のものと思われ、明治42年額田の檜山に売却。額田に売却した山車は、須賀神社庄野組の鳳凰車で、現存している。大正4年山車新造。現山車を昭和35年新造

3 ◆元能見中町

長：4300 幅：2300 高：3300

昭和28年、花車に山車枠取り付けし、現山車の原型とし昭和32年新造

4 ◆元能見南町

長：5800 幅：3200 高：3500

昭和33年新造。地元職人の手による。

5 ◆城北町・柿田町・元能見北町

長：4950 幅：2950 高：4100

順次山車曳を3町で行う。平成25年は柿田町、平成26年は元能見北が山車を曳いた。山車天井画の龍は岡田石嶺（明治19年生まれ）

6 ◆能見北之切

長：4000 幅：3000 高：3500

大正時代に上山撤去。彫刻のある壇箱裏面に「(略) /尾州名古屋/末廣町彫物師/瀬川治助/重定 花押/ (略) 文政五年(1822) /壬午/六月吉日」とある。昭和31年保有山車をベースに新造

7 ◆能見中之切

長：5200 幅：3500 高：4300

昭和28年、総檜造り山車新造。旧幕使用。能中と刺繍された赤見返幕裏に「干時 元治元年(1864) 申子四月大吉日新調之」、側面腰水引幕は紺地に金糸銀糸で阿吽の獅子が刺繍されている。

8 ◆能見南之切

長：5500 幅：2800 高：4150

明治初年頃、半田（松塚町か？）より山車購入と伝承。大正6年単層とする。明治45年までは、上山があったつくりである。

(2) 矢作町2区・3区の山車

矢作神社の祭礼は、10月1・2日に秋祭りとして行われている。四つの祭り組には、山車があり、矢作神社の祭礼には仕組んで、マチ曳を競ったという。大正12年、岡崎街道に愛知電気鉄道が東岡崎まで路線を敷設するためガードを設置したので、東之切の山車は巡行不可能となり、知立に売られたという。次いで、上之切の白木造りの山車も、故あって、半田の奥津に売られていった。

現存する矢作の山車は、2輛となった。戦争末期に西中之切（3区）では、山車を戦災から守るため、分解した飾りを桜井寺に疎開した。胴柄（山）と車輪は公会堂に置いていたが、公会堂が焼け、同時に胴柄と車輪も焼失した。しかし、飾りは無事であったから、戦後、寄進により胴柄と車輪を新造し、以前の山車を復元することが出来たという。東中之切（2区）の山車は戦災にも合わず無事であった。

以下、西中之切（3区）山車の調査記録を記しておきたい。

◆ 山車の曳行記録

近世、近代についての曳行記録については、再度文献調査をしっかりとしなければならないと思う。

今回の聞き取り調査では、昭和19年以降の状況が確認できた。

- ① 昭和19年 額田桜井寺に飾り物等疎開・・・記念写真あり？
- ② 昭和20年 岡崎空襲 3区山車、胴山、車輪（ゴマ）焼失
- ③ 昭和25年 山車曳行
- ④ 昭和34年 山車庫完成
- ⑤ 昭和49年10月6日 山車曳行
- ⑥ 平成2年 平成天皇即位祝賀曳行 大棒長 鋤柄欣宥
- ⑦ 平成5年 山車曳行 大棒長 野村豊治
- ⑧ 平成22年 矢作3区山車保存会発足
10月2日 山車曳行 大棒長 若園勝輝
- ⑨ 平成25年 山車曳行 大棒長 金森誠也

曳行としては、かなり不定期で何年も空いてしまう場合が合見られる。平成22年には3区山車保存会が設立され、山車曳行に努力する方向で動き始めている。また、2区の保存会同士の連携も動き始めている。

◆ 山車の記録（墨書銘）

前山唐破風鬼板裏に以下の墨書が確認できた。

天保十歳

亥六月出来

惣頭領 材木町

大山庄八

彫刻師 名古屋
瀬河治助
木町 柴田又治郎
木地師
木町 菅駒治郎
太田源治郎
大山芳治郎

前惣塗師
西町 富士田和三郎
伊賀 加藤藤吾郎

山形塗師
横町 近藤清治郎
伊田 加納辰治郎

箔置師
連尺 内藤岩吉
木町 大山正女
太田喜代造

萬筆 小僧勘助

とあり、天保十年（1839）6月に完成したことをはっきりと裏付ける資料が確認できた。また、彫刻師は名古屋の瀬川（河と記載）治助（重定か重光）父子であることは、明らかである。また、脇障子彫物（左右対）の下隅に朱で「清川」の刻銘が認められた。これは、「きよかわ」でなく「せがわ」と読ませた、瀬川治助の「遊び心」と思われる。

この山車は、総頭領が岡崎城下材木町の大山庄八であり、彫り物師以下岡崎の職人集団で作りに上げていることを裏付ける貴重な史料でもある。

また、矢作2区（東中之切）の山車の墨書銘に「庚 天保拾壹歳 子六月吉祥日 吉野屋庄八作之 山ノ前 矢作 東之堺 若連中」と書かれているものが認められる。さらに、檀箱彫物の側面隅に「瀬川」の陽刻と「重光」の陰刻の印型彫が認められる。吉野屋庄八は、3区の大山庄八と同人物であろう。

これらからするとほぼ同時期に2区と3区の山車が完成したことになる。また、同じ名古屋の瀬川治助が関わって、材木町の大山庄八が岡崎の職人集団を束ねて、完成をしている。矢作地区の山車の再調査（総合調査）をする必要があると強く感じた。

◆ 山車の構造（単位：³/₉）

- ① 車輪（ゴマ） 松材 直径 900

厚さ 300

戦前の物は、戦災にて焼失。戦後作成。(3区新実広次氏の手作りと聞く)
この車輪は、塩漬け保管され、大事に使われてきた。

平成21年に車輪(ゴマ)の改造を行う。

集成材 直径 1000 (単位: mm)

厚さ 300

- ② 車軸 檜材
- ③ 台輪(車台) 松材 間口 2420 奥行 4140 妻台輪 平台輪
- ④ 骨組 檜材 山の最長時(総高) 6420
- ⑤ 梶棒 杉(檜材)
- ⑥ 前戸屋(御拝)
- ⑦ 上段
- ⑧ 屋根

この中で、前山の鬼板(楠木正成・正行親子の別れ)の止めの部分にもズレと歪が生じ、最近新たなビスで止められている。この鬼板の後ろの屋根も欠損している状況である。この屋根の下部分の板に龍の墨書が見られる。若者中という記載が見られた。下絵か落書きか判然としない。

上山は、屋根がないために損傷が激しい部分がかかり認められる。さらに軒垂木の庇先端の損傷が激しい。また、屋根がないためか野馳板の反りが見られる。さらに化粧野地版の乾燥・収縮等による剥がれが見られた。軒先庇部分(軒垂木)金箔の変色が見られる。

上山の唐破風は、全体的に金箔・漆・金具等の経年劣化が激しいように思える。

◆ 山車の飾り

- ① 正面・・・唐破風の二重屋根
破風 黒塗りに菊 桐の金具
- ② 上山中段・前戸屋・・・金銀の箔を押しした鞠と戯れる獅子の親子
- ③ 鬼板・・・楠木正成・正行父子「桜井の別れ」
- ④ 懸魚・・・三羽の鳳凰
- ⑤ 欄間・・・池に龍が上下対に設えられている。
- ⑥ 伊達柱4本・・・竹に虎の透かし彫
- ⑦ 檀箱・・・見事な龍の彫物。左右には力神(力士像)が伊達柱を支えている。
- ⑧ 上段・・・黒塗りの丸柱。紅色の刎高欄。松と鶴を配した回り枠。四隅と中間6ヵ所の象形。獅子頭
- ⑨ 御簾

飾り物にも、経年劣化が随所に見られる。特に金箔の擦れ落ちが目立つ箇所が多い。また、エビ垂木受け、軒桁、妻虹梁などには、金箔の擦れ落ち、彫刻部

分の割れが目立つ状態である。さらに、金具の金箔の劣化が目立つ。前山檀箱の龍の歯のひび割れ、髭の鉄線の露出、一方の髭は、根元から欠落。前山懸魚の鶴の両足が欠落している状況である。前山鬼板（楠木正成・正行父子の別れ）松が麻ひもで固定されている。

以上のように状態としては、良好でないと判断せざるを得ない。上山の屋根の部分の復元も含めて早急に検討し、対策を講ずる必要があると思われる。

◆ 幕

① 天幕・・・上山屋根軒下の紫色の幕

② 青白幕・・・山車洞山と大幕の間に張る。

以下の人たちに寄進による青白幕

総代 新実広次

昭和42年10月 副総代 酒井利輔

〃 澤田憲一

③ 大幕・・・山車の骨組みや囃子方を隠すため、山車の両側と後部を囲む猩猩緋色の緞帳。中央には白地の布で腹巻をし、前部で固定する。

④ 水引幕・・・大幕の上部に吊るす。山車の側面と後部の装飾。黒地に金糸・銀糸を用いて龍と波を縫い取り、目には玉を嵌め、爪に銀板を張る。

幕の状態は、上山、前山に比べれば状態は良好である。ただ、天幕、大幕、水引幕には、数か所のほころび等が見られるので、手当てをしておく必要がある。

◆ 山車曳行の実際

鋤柄欣宥さんに話を伺い、鋤柄さんが大棒長を務めた平成2年11月12日（月＝祝日・即位の礼の日）の実際を報告する。

① 曳行日時

平成2年11月12日 午前9時30分～午後3時30分

② 曳行経路

3区山車宿出発→旧道左折→2区消防庫前（反転）→旧道西進→4区神社前（反転）→島田屋菓子店右折[昼食]→国道1号線横断→矢作駅前（反転）→矢作タクシー右折→中道東進→八百美ストア（反転）→中道西進→キバナヤ洋品店右折→国道1号線横断→島田屋菓子店右折→旧道東進→彌五騰神社前左折→宿入り

③ 曳行役割及び人数並びに役職者名

・役割及び人数

大棒	大棒長以下	58名
山上係	班長以下	5名
山下係	班長以下	2名
	（作業者は大棒と兼務）	（15名）
引綱係	班長以下	6名

子供係	班長以下	17名
お囃子係	班長以下	8名
躍り係	班長以下	3名
		99名

・山車曳行役職者名

総務部長	野村直央	副部長	鈴木建作	池田茂男
会計部長	林 成晃	副部長	市川栄夫	
警備部長	鈴木 博	副部長	沢田恒之	福永正俊
接待部長	加藤清治	副部長	本多 勝	林 克彦

大棒長	鋤柄欣宥	副大棒長	左宗敏明	加藤 昭
大棒長補佐	三浦照男			
山上係班長	新実忠久	副班長	畔柳芳弘	
山下係班長	大山時二郎	副班長	赤坂正好	
引綱係班長	荒木宏文			
囃子係班長	野村喜三男	副班長	山下重信	
踊り係班長	鈴木健作			
子供係班長	山本記美江	副班長	細井秀子	青山ヒデ子

- ・大棒長 一世一代 山車曳行の全責任を負う。
- ・立切（たちきり） 車輪を地面から浮かせて、進行方向を90度または180度転換させること。
- ・山の上下 3段階に分かれている。資料3（山車法量図）参照
- ・曲場 山車が曲がる場所
- ・手踊り場所 9カ所（2区消防庫前、野村文具店前、彌五騰神社前、ますや雑貨店前、4区神社前、島田屋菓子店前、矢作駅前、佐野不動産事務所前、八百美ストア前）で行う。山車の前に10畳ほどの筵を敷き、その上で踊る。手踊りの際には、山を上段に上げ、踊り終了後は中段に下げ進行する。

④ 祭り囃子

六法、神車、七草、大拍子、車切、夜神楽が状況に合わせて演奏される。鳴り物は、大太鼓1、小太鼓2、鼓1、笛2～3、三味線1～2、鉦1などである。

東中之切（2区）の山車の構造や飾りも3区の山車とほとんど同様であるが、上屋根が上下に自由に動き、山の高さは上げた時7尺9寸、下げた時は6尺となった。また、前戸屋の鬼板の彫刻は牛若丸と天狗であり、地元で伝わる浄瑠璃姫と牛若丸の物語にちなむものである。

(3) 檜山須賀神社祭礼

① 概要

須賀神社の春の大祭は、「檜山の山車祭り」と呼ばれ、須賀神社から神明宮への神輿渡御に合わせて5輛の山車を組ごとに巡行する。山車の上では、お囃子が奏される。神明宮に到着後、「御照覧」として年番の2組による祭囃子が奉納され、夕刻には須賀神社へ帰着となる。

② 祭礼組織

氏子は6組で構成され、2組で3年ごとに年番を務める。山車組は血族関係を重視している。

③ 山車および囃子の特色 (明治26年火災焼失)

- ◆原組・・・竜神山車
- ◆庄野組・・・鳳凰山車 (能見より購入したと伝える)
- ◆仲組・・・恵比寿山車 (能見より購入したと伝える)
- ◆新居野組・新若丸
- ◆河瀬・宮北市組 (花組)・・・花車 (チャラボコ車)

(4) 本宿町祇園祭り

7月第4土曜日に行われる祇園祭りに、4輛の山車が出て、とても賑わいを盛り上げている。栄町が昭和10年に山車を造り、町内を巡行するようになり、戦後、西町や中町、東町も山車を造り、祭りを盛り上げていった。

補足

2-(1)-④「各町の山車の特徴」で紹介している山車の寸法について

平成28年3月に統一基準で計測。以後、次の数値を各町公式とする。

■ 能見神明宮各町 山車の規模

[長さ(梶棒を出した時)・幅・高さは最大値、重量も補記]

町名	長さ(cm)	幅(cm)	高さ(cm)	重量(kg)
材木二丁目	560	260	400	700
松本町	460	340	460	1,100
元能見中町	550	260	365	1,100
元能見南町	570	260	365	1,200
城北町・柿田町・元能見北町	575	405	390	1,400
能見北之切	570	310	400	900
能見中之切	540	340	430	1,200
能見南之切	550	280	440	2,200

写真資料



能見神明宮山車マチ曳





手踊り



能見南之切見返幕



会所開き



おひねり (花)





山車マチ曳一矢作3区(西中之切)一



山車蔵(庫)一矢作3区山車一



矢作2区（東中之切）山車

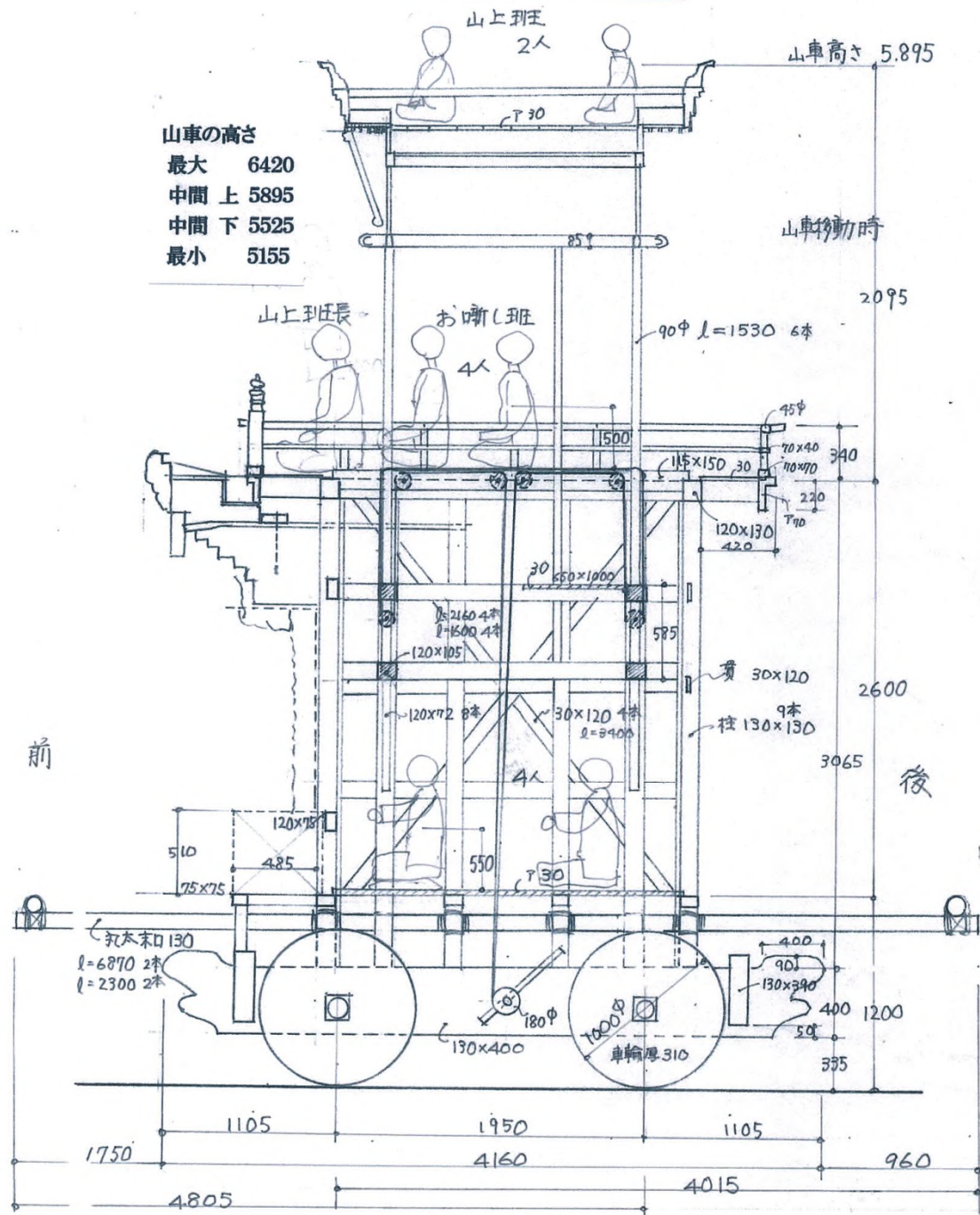


矢作2区・3区山車揃踏み

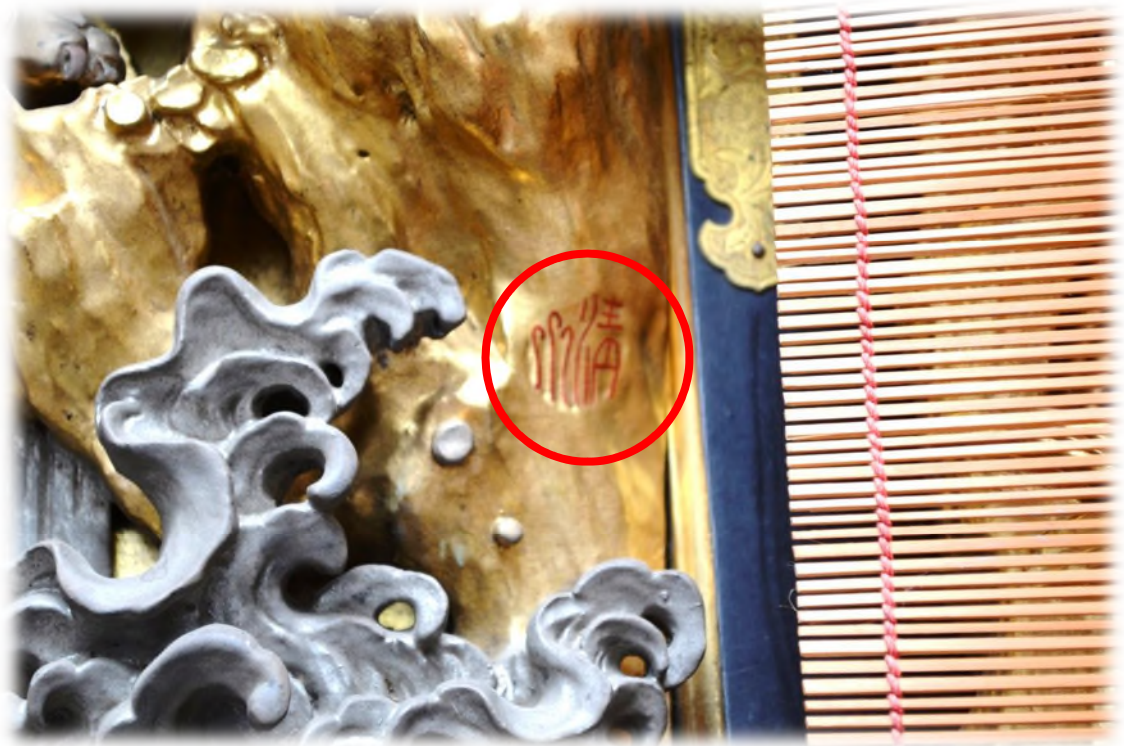


戦後作った車輪

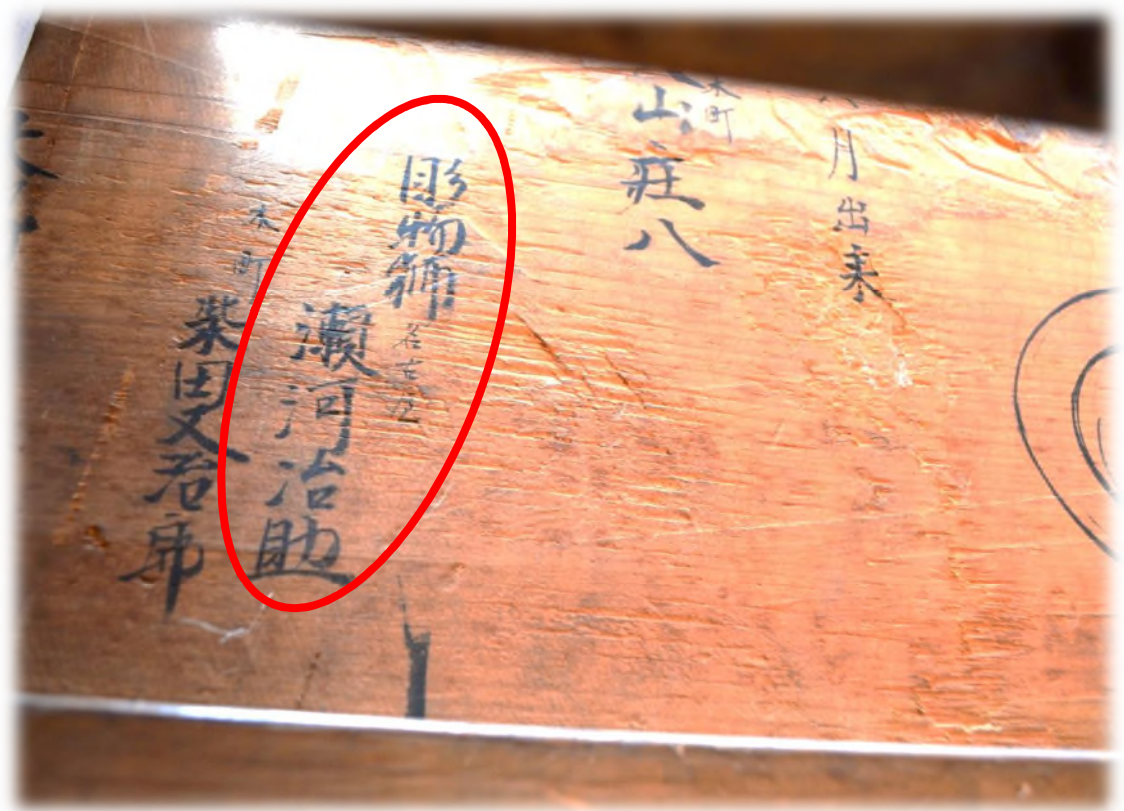
山車 荷重算定用断面図 縮尺:1/30



矢作3区(西中之切)山車実測図



清川（瀬川） 治助の朱印型銘一矢作 3 区山車一



彫物師 名古屋 瀬（清）河（川） 治助一矢作 3 区山車一



天保10年6月 惣頭領材木町大山庄八一矢作3区山車一



矢作2区水引幕 奥村石蘭画



須賀神社山車渡御



マチ曳



花組 花車 (チャラボコ)



御照覧



宮入

第2回 稲の力

— 「悠紀齋田お田植神事」「御田扇祭り」を例として—

平成27年6月22日

1 日本人にとってのコメ（米）

(1) コメの歴史（赤米・黒米・白米）

コメ＝富とされ、以降明治時代の初期まで、コメは税としての役割を担ってきた。江戸時代には、藩の大きさを石高で表し、給料もコメで払われていた。

各時代の権力者たちは、水田を含む領地をめぐって合戦を繰り返し、また稲作を発展させる為に様々な政策を施してきた。このように政治・経済・庶民（常民）のくらしの範囲で、コメは重要視されていた。

以下、各時代の特色をピックアップしてみる。

- ① 日本への伝来・・・弥生時代。現在では、縄文晩期とする説が有力。焼米
- ② 大和・・・・・・・・稲作技術の進歩
- ③ 奈良・・・・・・・・コメは貴族の主食。農民は、収穫した稲の3%を税として納める。この頃のコメの食べ方として、玄米を甑で蒸した「強飯」（こわめし）、水をたっぷり加えて炊く粥（かゆ）、ご飯を干した「ほしい」が挙げられる。
- ④ 平安・・・・・・・・生産力向上。平安後期は、戦乱が続き生産力が徐々に減少。固粥（かたかゆ）、姫飯（ひめい）が好んで食べられた。姫飯は粥より水分を少なめにした固めの粥のことで、現代人が食べているのが、この姫飯にあたる。
- ⑤ 鎌倉・・・・・・・・二毛作出現
- ⑥ 室町・・・・・・・・奈良時代の2倍の収穫量
- ⑦ 安土・桃山・・・・汁かけ飯の出現。この頃になると庶民の中にもコメを食べる人が増えてきた。
- ⑧ 江戸・・・・・・・・天保年間、国内の水田面積が、奈良時代の3倍まで膨れあがってきた。農民はというと「百姓は常に雑穀を食すべし、みだりに米を食むことを得ず」とされ、雑穀に草木を混ぜた雑炊を食べていた。江戸時代中期になると生活も安定し、武士の間で白米が食べられるようになり、農民も徐々にコメを食べるようになった。

⑨ 明治・・・・・・・・日本人の主食は、白米

(2) 穀霊

稲、麦、トウモロコシなどの穀類に宿る霊魂のことを指す。農耕民の多くが、毎年同じように芽を出し、成長し、実り、枯れる穀物に人間の一生を重ね合わせ、人間に魂があるように穀物にも魂がと見え、そして穀霊を保護し、祀ることによって豊作が得られると信じている。穀霊観念とこれに基づく儀礼・慣行は程度の差こそあれ、未開、文明を問わず、穀物栽培を生業とする諸民族に広く分布する。その典型的なものは稲作地帯に見られる。多くの事例は、稲の精霊・霊魂（**稲霊・稲魂**）が、人間と同様に**誕生（発芽）、成長、成熟、死（枯死）、再生**の過程を繰り返すとの観念に基づいている。

では、なゼイナヅマは、稲妻という漢字が当てられるのであろうか。

古代、稲の結実期に雷が多いことから、雷光が稲を実らせるという信仰が厚かったことによると言われている。そのため、稲妻は「**稲光**」「**稲魂**」「**稲交接**」（いなつるび）とも呼ばれ、頭に「**稲**」が付けられる。

2 悠紀齋田お田植神事

(1) 大嘗祭とは

大嘗祭は、天皇が即位の後、大嘗宮の悠紀殿、主基殿に初めて新穀を供え、国家・国民のためにその安寧と五穀豊穰などを感謝し祈念するもので、天皇一代に一度だけ行われる儀式（**踐祚大嘗祭＝せんそだいじょうさい**）である。大嘗祭を行うに当たり、その年の新米を作る田を齋田と称していた。

齋田は、京都以東以南を悠紀の地方、京都以西以北を主基の地方と定めている。**悠紀と主基は齋国（いつきのくに）**と言われていた。大正3年2月5日齋田**卜定**の儀が行われ、悠紀の地方は愛知県、主基の地方は香川県が選ばれた。

(2) 齋田地として選ばれた背景

齋田地として選ばれた理由・背景として、以下の3つの理由が伝承されている。

- ・耕地整理が完了していた。（明治34年着工、明治37年竣工）
- ・用排水路が整備されていた。（高橋用水・占部用水・安藤川が改修終了）
- ・交通の便が良かった。（西尾軽便鉄道の整備。中島駅・占部駅）

(3) 大嘗祭悠紀齋田・主基齋田の位置付け

私は、平成25年に、両齋田のお田植祭りを観察・調査を実施することができ

た。その結果、両齋田共に遺跡、願い、想いを保存会という組織を生かしながら現在に伝えようとする熱意と情熱を強く感じ取ることができた。このことから、両齋田の位置付けは、以下のように結論付けることができる。私自身は、折口説を基本的な捉えの中心に置きたいと考える。

大嘗祭が基本的には鎮魂の祭りであり、このテーマを鋭く論じたのが、折口信夫の「大嘗祭の本義」である。それによると『日本書紀』に見える「天皇霊」という語は先帝の外来魂を意味したが、新帝は大嘗祭においてこの外来魂をわが身に付け、新しい天子としての威力を生み出す（鎮魂の第一義）。ついで、即位した新帝は、自らに付着せしめた天皇霊を分割して、親しく近い人々に分配した。すなわち分割した魂を御衣（おんぞ）に付けて分配したのである。これを**天子の衣配（きぬくばり）**という（鎮魂の第二義）。天子は毎年の暮（冬）になると魂が須弱し浮動ししやすい状態になる。その不安定な状態を鎮めるために、宮廷では11月になると日を卜定して**たましずめ**の儀式を行った。つまり年ごとに行われる魂の強化であって、いわゆる鎮魂祭にあたるものがそれである（鎮魂の第三義）。

折口は、秋の終期に行われる収穫祭の根底に、秋から冬にかけて行われる鎮魂の観念を読み取ろうとしているのであり、それが天皇の代替りに際しては、先帝の霊（天皇霊）を新に付着させる観念と重層していたと考えた。いわば大嘗祭には、外来魂の付着と鎮魂という両義的な機能が含まれていたと結んでいる。

私自身の大嘗祭の捉えは、**国王の即位式に当るもので、魂の再生についての稲作農耕民族の伝統的な生命観・靈魂観に由来すると理解**している。

以上のような捉えで、再度、悠紀齋田の儀礼を見直して見よう。そのためにも、大嘗祭悠紀齋田の大正4年の儀礼の位置付けを検討する必要があると感じている。

- | | | | | |
|----|--|-----------|-----------|-------------------|
| 1 | 齋田決定示達式 | 大正3年3月7日 | 午前10時30分 | 愛知県庁知事室 |
| 2 | 故「鶴田勝蔵」翁霊前報告祭 | 大正3年4月1日 | | 八幡社 |
| | ※大正3年4月11日明治天皇お妃「昭憲皇太后」が崩御され登極令第18条により大嘗祭は1年延期となる。 | | | |
| 3 | 大嘗祭悠紀齋田祓式 | 大正4年4月22日 | 午前10時30分 | 悠紀齋田 |
| 4 | 齋田鋤入れ式 | 大正4年4月22日 | 午前12時 | 悠紀齋田 |
| 5 | 播種式 | 大正4年4月23日 | 午前6時 | 悠紀齋田 |
| 6 | 水口祭 | 大正4年4月23日 | 午前9時 | 悠紀齋田 |
| 7 | 悠紀齋田御田植祭 | 大正4年6月5日 | 午前10時 | 悠紀齋田 |
| 8 | 御田植祭祝賀会 | 大正4年6月5日 | 御田植祭終了後 | 六ツ美第三尋常
高等学校校庭 |
| 9 | 御田植終了報告祭と豊穰祈念際 | 大正4年6月7日 | 4号田御田植終了後 | 悠紀齋田 |
| 10 | 抜穂式齋場地鎮祭 | 大正4年8月15日 | 午前8時 | 悠紀齋田齋場予定地 |
| 11 | 抜穂前一日大祓の儀 | 大正4年9月19日 | 午後3時 | 矢作川大聖寺磧 |

12	悠紀齋田拔穂式	大正4年9月20日	午前10時	悠紀齋田齋場
13	供納米点検式	大正4年10月15日	午後	八幡社
14	齋田米供納式	大正4年10月16日	午後3時	京都御所
15	新穀供納祝賀記念式	大正4年10月21日	正午	愛知県商品陳列館
16	大嘗祭	大正4年11月14日		大嘗宮(仙洞御所)
	悠紀殿供饌の儀	大正4年11月14日	午後7時	大嘗宮悠紀殿
	主基殿供饌の儀	大正4年11月15日	午前1時30分	大嘗宮主基殿
17	大饗第一日の儀	大正4年11月16日	正午	名古屋市鶴舞公園
18	御大礼愛知県奉祝会祝賀会	大正4年11月17日	正午	名古屋市鶴舞公園
19	悠紀齋田奉賛会解散式	大正4年12月11日	午後1時30分	碧海郡役所
20	御下賜金品伝達式	大正5年1月6日		愛知県庁知事室
21	御下賜金伝達式	大正5年3月31日		六ツ美第三尋常高等小学校

(4) 平成26年6月3日(日) 悠紀齋田お田植祭り 当日の実際

- ◆ 6:00～ 苗取(加藤氏所有の苗場)
- ◆ 10:00～ 齋田準備
- ◆ 12:15～ 大正宮神事準備
- ◆ 12:20～ 清めの手水準備
- ◆ 12:30～ 大正宮祭殿開扉
- ◆ 12:31～ 神事
宮総代から清めの手水。続いて、町役員4名、祭礼担当者4名
- ◆ 12:35～ 玉串奉奠
- ◆ 12:50～ 終了

齋田公園に仮宮を設営し、神事を実施

- ◆ 13:30～ 六ツ美中学校ブラスバンド部リハーサル
- ◆ 13:50～ 清め(手水) 玉串奉奠
- ◆ 14:00～ 式典(開式のことば)
- ◆ 14:01～ 神事
 - (1) 修祓の儀 14:01
 - (2) 降神の儀 14:03
 - (3) 献饌 14:07
 - (4) 祝詞奏上 14:09
 - (5) 齋田の祓い 14:16
 - (6) 玉串奉奠 14:19
 - (7) 撤饌 14:30
 - (8) 昇神の儀 14:34

(9) 保存会長お礼のことば 14:36

(10) 来賓祝辞 14:39

(11) 閉式のことば 15:05

- ◆ 15:15～ お田植踊り
- ◆ 15:28～ 田均し
- ◆ 15:30～ 神主苗を田に入れる
- ◆ 15:31～ 苗を斎田に投げ入れる
- ◆ 15:32～ 早乙女田の回りに整列
- ◆ 15:33～ 苗渡しの子ども斎田の中へ
- ◆ 15:34～ 早乙女達によるお田植
- ◆ 15:45～ お田植終了

3 御田扇祭りの今

御田扇祭りは岡崎藩の大庄屋制度である手永制度のもと、藩領である手永単位で行われた祭礼・行事である。**※手永＝行政区域。大庄屋を配置。水野忠善時代に導入**

御田扇祭りの初見時期としては、現在のところ宝暦年間（1751～1763）が初見かと思われる。しかし、これが御田扇祭りの起源とは言えないが、現在受け継がれている祭礼・行事の基本形は、この時期には、岡崎藩領の中で行われていたことになる。

現在、この祭礼は、巡行していく形態を残している地域が2カ所、一部地域の町内だけで巡行していく形態が1カ所、氏神の中に合祀され、祀られている地域が3カ所である。この6カ所（A～F型に分類）の調査を3年に渡って記録したものである。

(1) A型（堤通り地域型）堤通り手永の場合

天保年間（1830～1843）の頃は、6月中旬頃より6～8日かけて各ムラを巡行（神輿引き継ぎ）する形態をとっていた。**弘化年間（1844～1847）以降より中之郷村より始まり、25カ村を数日かけて巡行し中之郷村へ帰ってくる形態に変化した。**

明治24年（残された記録から判断すると）からは、現在のような1年ごと、神輿を引き継いでいく形に変わった。

「岡崎藩萬書上」（寛政元年＝1789）の手永の規模は、石高：1,198,045石 人別：5,941人。以下の手永の規模は、「岡崎藩萬書上」による。

現在は、20町 {中之郷・上青野・高橋・上合歓木・下合歓木（以上、岡崎市）・高落・新村・西浅井・東浅井（以上、西尾市）・安藤・福桶・下三ツ木・上三ツ木・下青野・在家・土井・牧御堂・法性寺・宮地・赤渋（以上、岡崎市）} が参加。1年間は、受けた神輿を当番地域に留め置き、明くる年に次の町へ送る、順送りの形態

をとっている。いわゆる「順送り型」といわれるものである。堤通り手永、弘化年間の25ヵ村を記しておく。

下青野村 下土井村 在家村 上三ツ木村 下三ツ木村 上福桶村 下福桶村 安藤村 東浅井村 西浅井村 新村 高落村 下合歎木村 上合歎木村 高橋新田 中
青野村 上青野村 中之郷村 赤渋村 福島新田 久後村 宮地村 法性寺村 牧御堂村 上土井村である。

● 御田扇祭り巡行の実際

ここでは、平成24年7月22日(日)に行われた中之郷町から上青野町へ送る場面を報告する。

まず、中之郷神社を出発するときの行列の様子を記す。

先達：1人 大麻：宮司 白杖2本：2人 奴道中：子ども25人 救護班：3人 高張提灯2基：4人 梵天2本：6人 大幟1基：7人 花傘(中之郷) 1基：7人 神職：宮司 役員：6人 氏子総代：4人 大団扇2本：4人 榊樽：6人 唐櫃：4人 御幣：2人 御神輿：10人 大団扇2本：6人 花傘(宮地)：7人 花傘(赤渋)：8人 小幟20本：22人 太鼓放送車：2人 屋台：6人 大人神輿：11人 子ども会役員：1人 女性部役員：2人 女性部踊り：102人 一般奉賛者：5人 救護班2班：4人 記録係：5人 行列支援：12人 花火：4人 接待：8人 浦安舞：4人 合計340人

また、引き継ぐものとして、「御田扇神宮品目録」「御田扇御神酒料積立簿」「賽箱」である。本年、中之郷町から上青野町に送られた目録の中には、以下のような記載が見られる。

御田扇神宮品目録

- 一、御神輿 壺組
- 一、御神輿台 壺
- 一、傘 壺対
- 一、御神幣 壺
- 一、梵天 壺対
- 一、提灯 壺対
- 一、榊桶 壺
- 一、榊台 壺
- 一、小幟 貳壺拾本(ママ)
- 一、大幟 壺本

平成二十四年七月二十二日

中之郷町

当番

この記録は、明治24年(1891)から残されている。また、「御田扇御神酒料

積立簿「旧岡崎藩領分堤通」の記録簿には、明治24年3月18日に旧岡崎藩領分堤通手永御田扇に御神酒料として、旧領主本多家より、金5円が下賜された。この記載が、新しい姿の御田扇祭りを示す史料として位置付けられるように考えられる。

この記録の本年度分には、以下の記載がある。

記

一、金拾五圓六拾壹錢也

但し赤浜町より受領しました
右金額を上青野町に送付します

一、大麻料 金参阡圓也

当町にて納入しました

平成二十四年七月二十二日

中之郷町

本多 達夫印

山田 靖印

石川 義弘印

鳥山 照章印

近藤 和美印

清水 良治印

石川 菊次印

山田 文雄印

近藤 鐘印

とある。最後に引き継がれるものとして、「賽銭箱」が挙げられる。この賽銭箱には、昭和五十八年七月十七日の墨書銘があり、この年に下三ツ木町が新調し、寄贈している。

堤通り手永の御田扇祭りには、多くの祭礼道具が各町内、個人から寄附されている状況が確認された。その一端を示すと、大幟、梵天の台車、神輿台、神輿の担ぎ棒、神輿の上箱などが挙げられる。

(2) B型（山方地域型）山方手永の場合

山方手永は現在13町で神輿を巡行していく形態をとっている。巡行の順序は中村→坂左右→野畑→若松→針崎→柱→羽根→井内→下和田→国正→正名（以上、岡崎市）→永野（額田郡幸田町）→定国（岡崎市）であり、町を一つ飛ばしで神輿を引き継いでいく。いわゆる「飛ばし型」である。

近世後期の山方手永の規模は、25ヵ村、石高：9,998.045石。人別：5,941人。

大庄屋齋藤家居住下六名より占部用水筋25ヵ村を昭和初期まで盛大に陸渡御が行われていたと伝承されている。昭和16年より太平洋戦争のため中断したが、戦後の混乱期が過ぎ、社会経済が上向きかけた昭和31年7月7日より復活した。

昭和61年には、下六名、中六名、羽根、柱、針崎、若松、井内、野畑、下和田、坂左右、国正、中村、定国、正名（以上、岡崎市）、永野（額田郡幸田町）の15町で行われていたが、現在は13町で行われている。

大庄屋齋藤家は、江戸時代から屋敷内に寺子屋を開き、明治8年には、私財を投じて第68番小学校を開校させ、子弟の教育にも熱心であった。また、戦後の農地改革では46町分の田畑を小作民に開放した。明治初期の山方手永の25ヵ村は、上六名村、下六名村、上明大寺村、下明大寺村、戸崎村、羽根村、柱村、針崎村、上和田村、井内村、野畑村、下和田村、坂左右村、国正村、定国村、中村、正名村、二軒屋村、永井村、永野村、上羽角村、下羽角村、野場村、野崎村、駸馬村であった。

なお、正名町の幟には、正名二軒屋中という文字が染め抜かれている。

● 御田扇祭り巡行の実際

ここでは、平成24年7月1日（日）の坂左右町から野畑町に送ったときの様子を報告する。

送る側として、最大の人を要するのは、巡行の時である。行列の様子を記録すると以下のようなになる。

道中清め：2名（坂左右～野畑） 禰宜 先導（杖）：2名 長老 先導役員：4名（総代・副総代・生産組合長・信徒総代） 御田扇委員：3名（第3区委員長（代表）定国町、第1区委員長 若松町 第2区委員長 坂左右町 御幣1基：1名 榊樽1基：5名 高張提灯1対：4名 赤扇1本「山方手永」：2名 御神輿1基（御神符…豊受大神）：8名 御神輿の台2基：2名 日月旗（上に銀玉3個、赤幟）1対：4名 白扇「山方手永」1本：2名 雪洞（上に金銀の玉）1対：6名 花傘1基：4名 各町幟「天照皇大神」（送る年に新調）13本：26名 計75名である。

次に当日（送る側）のタイムスケジュールを記す。

6：00	祝砲（3玉）
8：00	会場作り
11：30	坂左右神明社全員集合（早めの昼食後集合） 渡御行列受け持ち担当確認
11：45	来賓（御田扇役員3名）・式典参列者手水・交通整理員配備
12：00	遷座祭式典 祝砲（5玉）
12：20	直会・総代挨拶

- 12:30 ご神前余興（奉納踊り）
- 13:10 交通整理員（4名）配備
- 13:20 威儀物整列、出発お祓い
- 13:30 坂左右町神明社出発 祝砲（3玉）
- 14:05 休憩所 到着（坂左右町地内）
- 14:15 休憩所 出発
- 14:30 下和田犬尾神社 到着
- 14:50 下和田犬尾神社 出発
- 15:00 下和田町野畑町境到着・野畑町氏子合流・引き継ぎ式
- 15:15 下和田町野畑町境出発
子ども用雪洞など5基を鉾神社手前で野畑町子ども会に渡す。
- 15:30 野畑町鉾神社到着（祝砲）
- ・御神輿本殿に鎮座
 - ・威儀物目録読み上げ
 - ・威儀物受け取り
- 15:50 坂左右町の奉納踊り
- 16:30 鉾神社式典 副総代指示により坂左右町は帰る。
- 17:30 反省会（公民館にて町内全員）

（3） C型（川西地域型）川西手永の場合

川西手永とは、岡崎藩領西南部で、矢作川西岸沿いの旧碧海郡である。岡崎市矢作地区と安城市東部にまたがる範囲で実施されていた祭礼・行事である。近世後期、川西手永に属していた村は、35ヵ村。石高：11,951.423石、人別：8,567人。村名を記す。東矢作村、西矢作村、筒針村、上渡村、下渡村、東牧内村、上佐々木村、下佐々木村、村高村、川嶋村、姫小川村、小川村、寺領村、木戸村、藤井村、古新田村、新々田村、嶋村、坂戸村、小望村、池端村、西牧内村、桑子村、八村、上条村、山崎村、高木村、別郷村、牧内新田村、東別所村、西別所村、宇頭茶屋村、尾崎村、宇頭村、田町分である。

以下、矢作神社に残されている史・資料をもとに報告する。

① 御田扇祭り巡行の実際

この手永の御田扇祭りは、昭和36年（1961）を最後に中止されている。大庄屋は、下佐々木の太田家で、祭りは旧暦の6月1日に行われるのが原則であった。記録によれば、明治29年（1896）の御田扇祭りは、7月11日（旧暦6月1日）に神輿が矢作神社に納められていた関係上、矢作町から出発している。巡行順を示すと以下のようなになる。

11日矢作→筒針（泊）、12日渡→東牧内（泊）、13日上佐々木→下佐々木（泊）、14日（以上、岡崎市）村高→福地（泊）、15日木戸→藤井（泊）、16日寺領→小川（泊）、17日姫小川→川嶋（泊）、18日河野→（以上、安城市）坂戸（泊）、19日東嶋→西嶋（泊）、20日小望→池端→西牧内（泊）、21日桑子→富永（泊）、22日新堀（以上、岡崎市）→上条（泊）、23日山崎→高木（泊）、24日大岡→北山崎（泊）、25日別郷→東別所（泊）、26日西別所→宇頭茶屋（泊）、27日尾崎（以上、安城市）→宇頭（泊）、28日北本郷→矢作（以上、岡崎市）へと18日間かけて、川西手永を一巡している。

この巡行順は、矢作から筒針へ廻る「右廻り」と矢作から北本郷へ廻る「左廻り」が1年交代で行われていた。矢作町の近隣のムラでは、早く廻ってくる年と、逆廻りになって遅く廻ってくる年があり、「早廻り」とか「遅廻り」と言っていた。

5年後の明治34年（1901）の記録では、7月16日（旧暦6月1日）に矢作を出発し、明治29年の廻りとは逆に、16日矢作→北本郷（泊）、17日宇頭→（以上、岡崎市）尾崎（泊）、18日宇頭茶屋→西別所（泊）、19日東別所→別郷（泊）、20日北山崎→大岡（泊）、→21日高木→山崎（泊）、22日上条→（以上、安城市）新堀（泊）、23日富永→桑子（泊）、24日西牧内→池端→小望（泊）、25日西嶋→東嶋（泊）、26日坂戸→（以上、岡崎市）河野（泊）、27日川嶋→姫小川（泊）、28日小川→寺領（泊）、29日藤井→木戸（泊）、30日福地→村高（泊）、31日（以上、安城市）下佐々木→上佐々木（泊）、8月1日東牧内→渡（泊）、2日筒針→矢作（以上、岡崎市）へと、明治29年の場合と同じ18日間かけて川西手永を逆に一巡しており、泊りのムラも1年おきになっている。

巡行するムラは、1日平均2村。夕方着いたムラで泊り、翌日午後1時頃出発する。ムラの規模が違うため、小さいムラでは、たくさんあった小幟を、一人でも何本も保持し、子どもも動員して運ぶムラもあった。また、かなりのムラでは法螺貝を吹きながら行列したことが伝承されている。行列は、男子のみで行い、夜は「オトマリ」とか「ヨゴモリ」と呼ばれ、主に若い衆が神輿の番をするのが通常であった。

神輿は、明治中期頃まで、大庄屋のあった上佐々木の太田家に安置されており、毎年、大庄屋を中心に祭礼が執行されていた。また、各ムラでは、「扇さんの行列が来るまでに、田の草を取っておかないと恥ずかしい」と伝承されている。これらのことからすると、御田扇祭りは、単なる虫送り行事ではなく、明らかに岡崎藩の意向が反映していた祭礼行事と位置付けることも可能である。

しかし、昭和16年（1941）、戦争のために中断され、矢作神社のみで継続されていた。昭和27年（1952）、「御田扇祭復活の案内」が出され復活す

る。

「拝呈、入梅も明け、愈々本格的な暑さがやってまいりました。御一同様には、益々 御多祥の御事と存じ心より御同慶申し上げます。陳者農作物の豊作を祈念する伝統的行事である皇大神宮の御田扇祭は、諸種の事情により過去十年近く中止のやむなきに到り今日に及びました。此の間独り矢作神社に於いて祭事を執行致していましたが、講和条約発効を記念致しまして、本年より再び復活して年中行事と致したく存じます。

各御関係の御村落に於いては突然のことにて種々御事情も生ぜらるることとは存じますが、五穀の豊穰を祈念する行事のこととございますから何卒御諒承下さいまして御協賛の程をお願い申し上げます。つきましては神輿到着の際は公私御多用にて甚だ恐縮とは存じますが奉迎下され、且つ次字へ御奉遷下さいませ様重ねてお願い申し上げます。

事前に御諒解を得べきが本意のところ余日なきため、失礼ながら文書を以って右御願ひ旁々御依頼まで申し上げます。 敬具

昭和二十七年七月十七日

碧海郡矢作町大字矢作

矢作神社

御田扇祭世話係

川喜多広吉

三井 三二

安藤初太郎

鋤柄 護夫

加藤徳三郎

殿

追伸

神輿御到着の日時は後日御通知申し上げます。」

昭和27年7月21日 矢作神社 川喜田広吉より

「謹啓 先般は当矢作神社の総代が御多用中突然参上致しまして、御田扇祭実施につき早急なる御願ひ申し入れましたところ貴字を始め関係各字におかれましては格別の御厚意と御理解を以って快よく御協賛くださいましたことを謹んで深く御礼申し上げます。

実は永らく中止のままと相成って居りました為、詳細なる記録もなく準備万端不行届きにて種々御迷惑相かけることを存じ誠に恐縮に存じます。

尚又御村落におかれても合併分立等のことあり御順路御駐留等も従前とは当然変更の要を生ぜらるることと存じますが一応別紙の通り日程を決定致しましたから本年の処は格別の思召し以って御寛大に御取計い願ひ上げたく隣接各字と宜敷く御連絡の上御奉迎下さいませよう伏して御願ひ申し上げます。」

上記2点の書簡により10年間中止されていた御田扇祭りは昭和27年（19

5 2) 当時の関係者の努力、とくに矢作神社宮司川喜田広吉の努力が実を結んだ結果であることがしっかりと読み取れる。そして、川西手永は、中止から復活と江戸期の巡行(村)形態をしっかりと現代まで伝承してきた唯一のタイプである。復活して10年ほど継続されたが、昭和36年になると、祭礼を辞退するムラも出てきた。安城市尾崎町では、昭和36年6月26日付で、御田扇祭りを辞退する以下の文書を提出している。

「岡崎市矢作町御田扇祭係御中

標記の件につき左記の事由に依り御辞退申し上げ、右御取計ひ下さる様本文を以てお願い申し上げます。

記

事由

- 一 当町の農耕地の中心に新国道開通し、自動車等の交通量日に日に増大
- 一 若手青年等就職甚しく、みこし、作り物等担ふ者減少
- 一 評議委員会、総会に於ても相談、協議、承認を得」

この年は、伊勢への代参も済んでいたため、何とか行われたのが実情であった。しかし、翌年下記の廃止文書が出され、再び中止となってしまった。

「拝呈 暑さきびしい愈々ご清栄の段お喜び申し上げます。先般ご依頼致しました御田扇祭の件に付きましては早速ご回答いただきまして誠にありがとうございました。ご由緒と永い歴史をもつ年中行事でしたが、皆様方のご意向に従って中止を決定致しました。つきましては、当矢作神社に於て御田扇祭を執行してはどうかというご意見もありますので、とりあえず本年は左記のとおり執行いたしたく存じます。暑い折しかも遠路のところ恐縮ですが何卒ご参拝の程お願いします。

昭和三十七年七月十八日

矢作神社社務所

岡崎市矢作町字市場三十八

御田扇祭関係町代表者殿

川喜田広吉

記

- 一 日時 七月廿七日 午後二時から
- 一 場所 岡崎市矢作町 矢作神社
- 一 行事 御田扇祭執行及び今後の運営方法について協議」

こうして昭和36年を最後に川西手永の巡行形態をとる御田扇祭りは再度の中止に追い込まれた。昭和35年東洋レーヨン岡崎工場の完成、昭和37年碧海郡六ツ美地区の岡崎市への合併、矢作町地内の国道1号線バイパスの完成などの社会状況の変化が再度の中止に追い込む背景であったと想像される。その後、矢作神社で関係者のみで行われていた御田扇祭りも昭和51年(1976)に中止された。

① 川西手永最後の御田扇祭り聞き書き

昭和36年に行われた川西手永最後の歴史的なそして、おそらく二度と復活される

ことはないと思われる御田扇祭りの記録を聞き取り調査で復元する。

【陸渡御で使用されたモノ】(単位は寸)

- ア 提灯2張(径34、長さ60)(御田扇の字句あり)
- イ 大幟1本(縦373、横67.2)(皇大神宮御田扇祭の字句あり)
- ウ 造り物1台(縦75、横52)(酒樽に菰を被せ、その上に五穀で作ったその年の干支に因む動物を鳥居の中に入れて飾る)
- エ 日月旗2本(縦92、横32)(白地に金糸と銀糸で月と星の形)
- オ 真榊輿1台(48、横48、高さ40)(鉢の中に高さ90くらいの榊が植え込まれている)
- カ 鋒2本(長さ165)(赤地に本の字と立葵の紋あり)
- キ 大幣1本
- ク 神輿1組(縦41、横41、高さ95)(神輿の中には、御神体として、鋏に模した木の枝と、馬の絵が描かれた扇が入っている。賽銭箱付き。)
- ケ 花傘1本(径137)
(黒地に赤丸の扇を5本程付け、桜に模した神花と共に付ける)
- コ 神輿台2脚
- サ 小旗35本(縦180、横28.5)(各ムラより1本、村の名前あり。主に男の子が持つ)
- シ 上箱(巡行には使わない)・・・万延元年(1860)の墨書名あり。

(4) D型〔上野(長瀬)地域型〕上野(長瀬)手永の場合

第2次世界大戦までは、阿弥陀堂(現豊田市畝部西町)から、7月中旬頃に1日に1町で1ヵ月ぐらいかけて全町を廻った。戦後は阿弥陀堂で、この町内を1日に限って、次の地区またはその次の地区に送っていく形態をとっている。

近世後期の上野(長瀬)手永の規模と村名を記しておきたい。

37ヵ村 石高 10, 588.7414石 人数 7, 012人

八町村、中園村、東大友村、西大友村、橋目村、舳越村、森越村、北野村、粟寺村、馬場村、下村、下村会下新郷、上村、上村槌木新郷、国江村、阿弥陀堂村、中切村、上宗定村、下宗定村、川端村、中島村、配津村、渡刈村、鴛鴨村、西鴛鴨村、大林村、西田新郷、行村、永覚新郷、上村新郷、下村新郷、国江新郷、馬場新郷、粟寺新郷、広畔新郷、焼寺新郷、西野新郷の37ヵ村である。

大庄屋は中園の岩槻家、その後阿弥陀堂の伊豫田家が務めた。

● 御田扇祭りの現状

現在の岡崎・豊田の両市にまたがる上野または長瀬と称する手永は、文化文政の時分まで、中園の大庄屋の岩槻家で、それ以降は、阿弥陀堂の大庄屋の伊豫田家で、御田扇祭りの神輿を受け継いできた。

近世後期上野手永の規模は、37ヵ村、石高：10,588.7414石、人別：7,012人現在では、1日に限って、阿弥陀堂の西神明社で御田扇祭りが行われている。7月上旬の御田扇祭りには、旧来の上野手永の範囲に属して、岡崎市西北部の8ヵ所と、豊田市東南部の21ヵ所を含む29ヵ所の自治区から、それぞれ総代や区長などの役職者が、阿弥陀堂の西神明社に招かれるしきたりが守られている。

平成22年6月27日の場合を記録する。

当日10時には、西神明社の社殿で、御田扇祭りの神事が宮司を中心に営まれた。地元の阿弥陀堂の関係者のほかに、上野手永の範囲から、29の自治会代表として、岡崎市内からは各総代、豊田市内からは各区長が参列した。

14時30分から、西神明社の社殿で、神輿の発御式があつて、阿弥陀堂の自治会の役員を始め、その年度の宮係など、10数名ほどが参列して営まれる。

15時から、御田扇の神輿を中心に、ほぼ一定の順序に連なり、西神明社の境内から出て行って、阿弥陀堂の地内を廻り歩き、畝部小学校の校内から引き返し、西神明社の境内に立ち戻るルートで巡行が行われた。

15時30分から、神輿の還御の式が行われ、全日程が終了した。

御田扇祭りでは、まず宮司が祓幣を持って、四辺を祓って進み、大庄屋家の当主が塩を撒いて、沿道を清めていく。また2人の役員が、それぞれ竿の先に箱の形を取り付けた、梵天と呼ばれるものを掲げていく。その4つの面には、「御田扇祭」「五穀成就」「天下泰平」「部内安全」と書かれている。さらに、宮係の2人で御田扇の神輿を担いで行く。別の1人が傘鉾に扇を提げたものを保持して行く。本年度の傘鉾には、13本の白地の扇と4本の黒地の扇が下げてあつた。その傘の中に入ると、病気にかからないというので、かわるがわるこれに入っていた。

(5) E型（額田地域型）額田手永の場合

平成26年9月13日（金）午前9時より、藪田町神尾幸男氏（大庄屋神尾家6代目当主）・藪田八幡宮氏子総代 神谷鋼二氏・藪田1丁目総代 櫻井幹雄氏に聞き取り調査・八幡宮本殿の内部調査を実施した。その結果を報告するものである。

① 御田扇祭りの実際

近世後期、額田手永に属していた村々は、37ヵ村、石高：8,140.4602石、人別：5,610人である。属していた村名を挙げれば、次のようになる。能見村、伊賀村、稲熊村、井田村、井ノ口村、百々村、東阿知波村、西阿知波村、東蔵前村、磯部村、岩津村、八ツ木村、仁木村、西蔵前村、藪田村、大樹寺村、上里村、上大門村、大門新田村、中大門村、下大門村、日名村、米河内村、蔵次村、安戸村、新居村、小丸村、一色村、外山村、北須山村、蕪木村、大ヶ谷村、柳村、渡通津村、駒立村、折地村、上田代村である。

額田手永の御田扇祭りは、明治末までは行われていたと伝承されている。大正初期

には中止になり、それ以後、毎年6月には藪田八幡宮で藪田町氏子のみで神事が執り行われていた。(平成19年まで実施)

大庄屋神尾家の現在の当主は、先代より御田扇祭りについて次のように聞いていると懐かしそうに語ってくれた。

明治29年に子爵本多家より御田扇祭りのために金5円を拝領したことと明治43年まで1年おきに左回り、右回りとなり37ヵ村を廻っていた。また、大庄屋である神尾家は米の出来具合を御田扇祭りで検見したと伝承されている。

額田手永の御田扇祭りが中止になってから、大庄屋の地元、藪田八幡宮に「田扇神」として祭神に昇格し、毎年「田扇祭」として6月に行われていた。

御田扇祭りは、毎年6月第一日曜日の9時より行われ、生産組合と奉賛会が中心となり神事が執り行われていた。神官は、小美町の浅井宮司、井田町の市川宮司が神事執行にあたった。参加人数は、30～40名ほどであった。月次祭の代わりに御田扇祭りを行ったとも伝承されている。しかし、御田扇祭りも平成19年を最後の中止されている。その理由として生産組合の組合員数が極端に減少(現在の組合員数3)したために執行が困難になったからである。この話の中で、たくさんの扇を見た記憶があるとの話題が出たので、その確認のために藪田八幡宮の本殿の中を確認させて頂いた。

② 本殿の御神体調査

神尾家での聞き取り調査をいったん中断し、藪田八幡宮の本殿の内部調査に取り掛かった。田扇神の御神体が入っている祠は、向かって左に存在した。

祠の法量：高さ・515 幅・310 奥行き・152

中に入っていたもの：大麻2点 春木太夫の銘あり

外宮大麻1点

扇：18本

内訳

5本扇：3 (未使用1)

6本扇：15 計：18本

扇の法量：広げた最大値で計測

5本 210

6本 300

扇の絵柄：曳き馬・稲・・・馬右向き

7本(6本骨扇)

曳き馬・稲・・・馬左向き 2本

(6本骨扇)

船・宝珠・米俵・・・6本(6本骨扇)

曳き馬・稲・・・馬左向き 3本

(5本骨扇)

③ 成果

調査を終えて、御田扇祭りは、必ず伊勢から扇を請けて来てこれを神輿に御神体として乗せ各村々を廻ったものと確信できる資料である。

額田手永では、明治43年に御田扇祭りが中止となり、大庄屋のあった藪田で田扇神として伊勢から請けてきた扇が御神体として祭祀されるような形になったものと考えられる。この動きを加速度的に推進した背景として、御師春木大夫の存在も見逃すことが出来ない。

額田手永の御田扇祭りは、時代の前後はあるが、現在のところ中止の状態におかれている。額田手永は、田扇神という形で地区の産土神として祀られ、崇敬を受けている。従って中止という表現を使った。

(6) F型(東山中地域型) 東山中手永の場合

六手永中最大の村数と石高を抱える手永である。大庄屋は現在の洞町の永井家である。その現状を記録することを試みるものである。

① 御田扇祭りの実際

東山中手永の御田扇祭りは、明治後半には中止(巡行)された。現在は、8月の第一日曜日の13時より御田扇社祭りを執行し、役員や崇敬者が参列し、行われている。五穀豊穰と虫よけを祈る。この時に、幟7本を立てる。「御田扇大神宮」と青地に白抜きの幟が6本、赤地に墨書の幟が1本が小鳥居(寛文7年・1667)に建てられた「明神型鳥居」の両サイドに立てられる。

近世後期東山中手永の規模は、42ヵ村で、石高:7,381.2814石、人別:5,962人であった。以下に東山中手永に属していた村名を記しておく。

欠村、友久村、栗木村、須渕村、鍛冶屋村、上村、麻生村、名ノ内村、小楠村、下毛呂村、上下呂村、初山村、蘭村、桃久保村、中保久村、伊賀谷村、岩屋(谷)村、中畑村、大井野村、板田村、田口村、箱柳村、小呂村、洞村、秦梨村、茅原沢村、桜井寺村、切越村、古部村、高落村、法味村、大河村、大山村、須山村、木下村、岡村、舞木村、羽栗村、池金村、鳥川村、亀穴村、石原村

② 聞き取り調査の記録

ア 小呂町

見たことはないが、あったということを親から聞いた。箱柳町から来て、小呂町へ送ったように記憶している。ウンカ送りも昔はあった。

イ 洞町

父から聞いた話だと、毎年このムラから扇さんが出て、東山中手永の42ヵ村を廻った。洞町→欠町→箱柳町→小美町へと、順に神輿を送った。明治後半には中止されたが、大正初頃、一度だけ復活したという。復活した理由は、各ムラか

ら、扇さんが出ないとさびしいからだという話を聞いた。2本くらいの赤や白の幟が10本くらいと、神輿が出たという。神輿は、八柱神社に現在もある。そして毎年扇さんの祭り（月中旬春祭りを扇さんの祭りと称していた）とって行われている。

社史の中に、「1892年（明治25）5月 子爵本多忠敬公より、立葵紋付高張提灯並びに御田扇様へ金25円を賜る」とある。

ウ 欠町

祖母から、あったと聞いた。洞町から来た。明治の終わりごろに無くなったと聞いている。

③ 現在の祭礼状況

明治後半に巡行は中止され、八柱神社での御田扇祭りとして行われている。現在は、8月の吉日の御田扇社祭（別宮 御田扇社として祭祀）を執行し、役員や崇敬者参列して継続されている。

以下、『洞町のあゆみ』（平成14年6月1日 洞町史編集委員会）の八柱神社社藏記録の「八柱神社と別宮」の項に御田扇祭りについての記載が次のように載っている。

「当東山中手永では、田植えが終わった後、稲を虫害から守り、豊作を祈願して神輿が管内の村々を巡回しました。行列の先達は法螺貝を吹き、笛や太鼓の鳴物入りで、提灯や大旗・錦樽が連なり、神輿の後に花笠や小旗連が続き、羽織袴の盛装者を含めて、7、80人に上る行列でした。

大庄屋の村を始点に、管内42ヵ村を一回りすると、泊りがけで十数日もかかりましたが、娯楽の少ない当時としては楽しいお祭りであったようです。

明治25年子爵本多忠敬公より、御田扇様へ金25円を賜りましたが、参加人員・経費等の関係で辞退する村が出るなど次第に減少し、明治の後半には中断されました。

現在は8月の第一日曜日に御田扇社祭を執行し、役員や崇敬者が参列しています。」

また、社史によれば、平成13年10月に別宮を新築し、その中に御田扇社が祀られている。

御田扇社の祭神は、「豊受大神宮」で御神札が入っていた。これは、毎年代参で請けてくるという。隣の御田扇祭りで使った神輿の中には、お白石が4個と「大麻春木大夫銘」ありが1点入っていた。

（7）伊勢神宮との関わり

御田扇祭りの発生、起源を考える場合に伊勢神宮とのかかわりを忘れてはならない。後本多時代のB型（山方地域型）、C型（川西地域型）、E型（額田地域型）、F

型（東山中地域型）から扇・鍬型が御神体として神輿の中に入れられていたことが今回の調査で明らかになった。さらに、伊勢御師の「春木太夫」の大麻3点、外宮大麻1点も確認できた。

以下、伊勢御師のかかわりについて概略を述べておきたい。

御田扇祭りの在地定着に大きな役割を果たしたと思われる伊勢御師（おんし）の動向について若干の検証を試みたい。※御師（おし/おんし）を伊勢神宮では「おんし」と言う。

伊勢神宮が内宮と外宮とに別れていることに相応し、御師も内宮と外宮に区分されていた。宇治に居住する内宮御師と山田に居住する外宮御師は、総数においても檀家数においても相当な差が生じている。

三河国内で活躍した内宮御師数は、明治初期において21名に及んでいる。三河全体を網羅している御師はおらず、ほとんどが一つか二つの郡にしか関連していない。

これに対して外宮御師の状況は、数量・規模ともに内宮御師を圧倒している。享保12年（1727）には609人（総檀家数428万余戸）も存在していた。「安永六年外宮師職国旦那家数改覚」でも、ピーク時より少しは減少するものの、全体で499人（総檀家数496万戸）を数えることが出来る。その内、三河国内に檀家を持つ御師は12パーセント強の54人に及び、伊勢・武蔵・尾張・美濃・近江に次、6番目の多さである。

檀那の階層を見てみると、安永期の春木隼人（春木文夫銘）は、本多中務大輔と内藤丹後守の両名である。前者は岡崎藩主、後者は挙母藩主である。春木大夫が岡崎藩主である本多氏（後本多）の御師であり、本多氏の転封と共に移動して来ている事実がある。

このことは、御師が藩主・藩士・民衆という階層にそれぞれ役割分担されており、地域区分での把握でなく、あくまでも人の把握のつながりを尊重されていたことを示すものである。

御師もしくはその名代の檀那廻り、御幣を配る目的で毎年実施された。そして、この御師たちの呪術性については、足立弘訓の『御師考証』の付録編にそれを示す状況が見出される。それは、室町時代の内宮長官荒木田氏経の書いた幾つかの書状の中に見出すことが出来る。「大神宮の神供品を上納の道中で掠奪するような輩は〈神敵〉である。もし不法な行為を止めない時は〈神宮の法を以て、神木、神灰によって沙汰をする〉と言っている。これはまさに、護摩の灰の呪力を以て調伏する、密教の祈祷を思い起こさせる。

従って、伊勢大神宮の御師は今日の神官等と違って、特殊な呪力を持つ者として畏怖されていたと思われる。御師たちの授ける御神札であるとか扇などは、一種の呪物であったと解釈してよいと思われる。御田扇祭りの神輿の中に入っている七本骨の田

扇も、絵柄を見ると蛭子大黒（これは陰形と陽物を象ったもの—山方手永で使用していたもの—平成23年の調査で確認）は、ただ単に虫除けだけでなしに、豊作をもたらす靈験のある靈物として珍重されたと思われる。伊勢神宮から配られる物は、鍬であれ、扇であれ、御神札であれ、それらはすべて最も尊い神の靈力の備わったという信仰が、伊勢信仰の在地定着と拡がりを示した要因であると思われる。そのメッセンジャーが御師であったと規定できると考えられる。

以下に岡崎藩と伊勢神宮との関わりについての文献史料を示しておく。

内田家文書 御用留 文化十四年

勢州御祓可相渡間、忌服相改麻上下着用致、明後五日朝五ツ時過此方役所江被出可被申候、為其申入候、以上

二月三日 奉行所
大庄屋 鈴木幸吉
同 孫右衛門

然ハ御田扇之内江相納候御札、御納戸ニ而相渡候間、明後五日朝五ツ時過兩人へ申合、請取ニ罷出可被申候、為其申入候、以上

二月三日 奉行所
六手永

大庄屋中

これは、額田手永大庄屋内田家の文化14年(1817)御用留に記されるもので、藩奉行所から大庄屋の鈴木幸吉と孫右衛門に「勢州御祓」、伊勢神宮祓札を渡すので出頭を命じ、さらに田扇の内に納める御札を御納戸で渡すので大庄屋兩人と申し合わせ、請取りに出向くことを六手永大庄屋に伝えたものである。文脈からすると田扇に納める札というのは伊勢の祓札であろう。近世の御田扇祭りにおける伊勢信仰との関わりを示す数少ない文献史料である。岡崎藩では天明元年(1781)の「岡崎・江戸御扶助様帳」(『中根家文書』下所収)では伊勢御師の山本大夫と春木大夫の兩人に米四十俵余を扶助し家中扱いとしているが、田扇の使われる御札もこれらの藩と特別な関係にあった伊勢御師により藩に持たされたものであろう。このような仮説から、岡崎藩としての受容がかなり現実味を帯びてくるような感じがする。岡崎藩主が伊勢御師の教えで、藩の統治と五穀豊穰を願うために取り入れた流れも考えられるような事例である。

(8) 田扇祭りの評価(今後に向けて—子どもたちに伝えていくべき心=ふるさととは—)

3年間の追跡調査を重ねたことによって、幾つかの新しい事実が確認できた。以下、列記しまとめる。

- ・御田扇祭りの文献の初見は、現在のところ宝暦年間(1751~1763)である。この頃は、手永から手永へ神輿を引き継ぐ形態であった。

- ・巡行形態は、20日余りで手永中を巡る。大庄屋の居村から出て、大庄屋へ還御し、1年ごと廻り順が反対になる。手永内で完結する形態（後本多家時代より）
- ・岡崎藩の施策の一環として、伊勢の扇を五穀豊穡の象徴として利用
- ・岡崎藩主と伊勢御師の密接な関係が明らかになった。
- ・御田扇祭りは、大きく3段階の変容を遂げている。
- ・扇と鋤型を引き継いでいく形態が、本来の型
- ・6形態の御田扇祭りが存在
- ・御鋤信仰との関連が密である。

（報告者の独り言）

自然一神一人の三者関係の中で培われてきた生活文化の集合体がふるさと（＝一人一人の心の中で醸成される心の拠所）である。そして「無縁」から「絆」の地域社会の復活を目指すための重要な素材としての御田扇祭りを伝えて行くことが今の大人の役割であると考えます。



大嘗祭悠紀斎田千齒扱きによる脱穀

大嘗祭悠紀斎田千齒扱きによる脱穀

写真資料



奉公者斎田八（悠紀斎田お田植神事）



田均し（悠紀斎田）



斎田へ苗（「萬歳」）を入れる（悠紀斎田）



早乙女によるお田植（悠紀斎田）



苗渡しは小学生（悠紀斎田 六ッ美南部小学校6年生女子）



早乙女・奉公者によるお田植仕上（悠紀斎田）



堤通り手永巡行（御田扇祭り 中之郷→上青野）



サカムカエ（御田扇祭り 上青野の代表が請ける）



上青野神宮へ到着（御田扇祭り）



山方手永巡行（御田扇祭り 野畑→針崎）



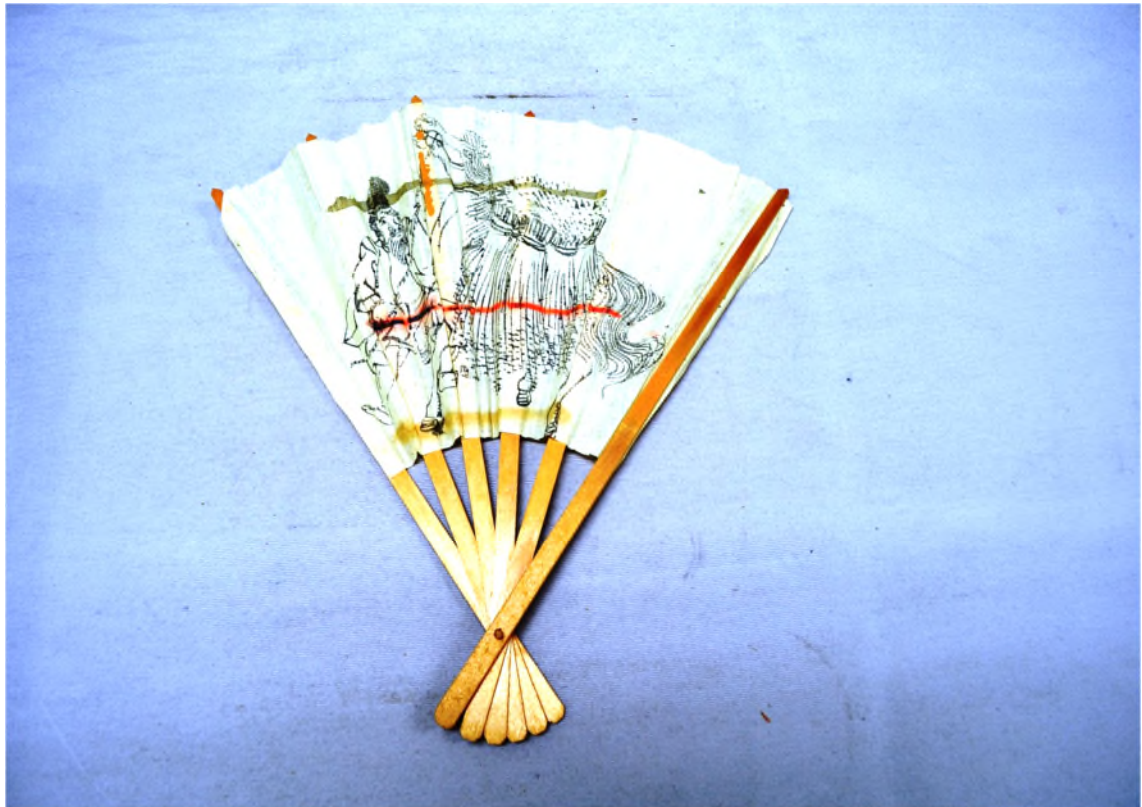
白扇と雪洞（御田扇祭り）



サカムカエ（御田扇祭り） 針崎が請ける・・・左側



伊勢御師大麻（春木大夫）



御神体の扇（御田扇祭り 額田手永）



御神体の扇（御田扇祭り 額田手永）



御神体の鍬型（御田扇祭り 川西手永）

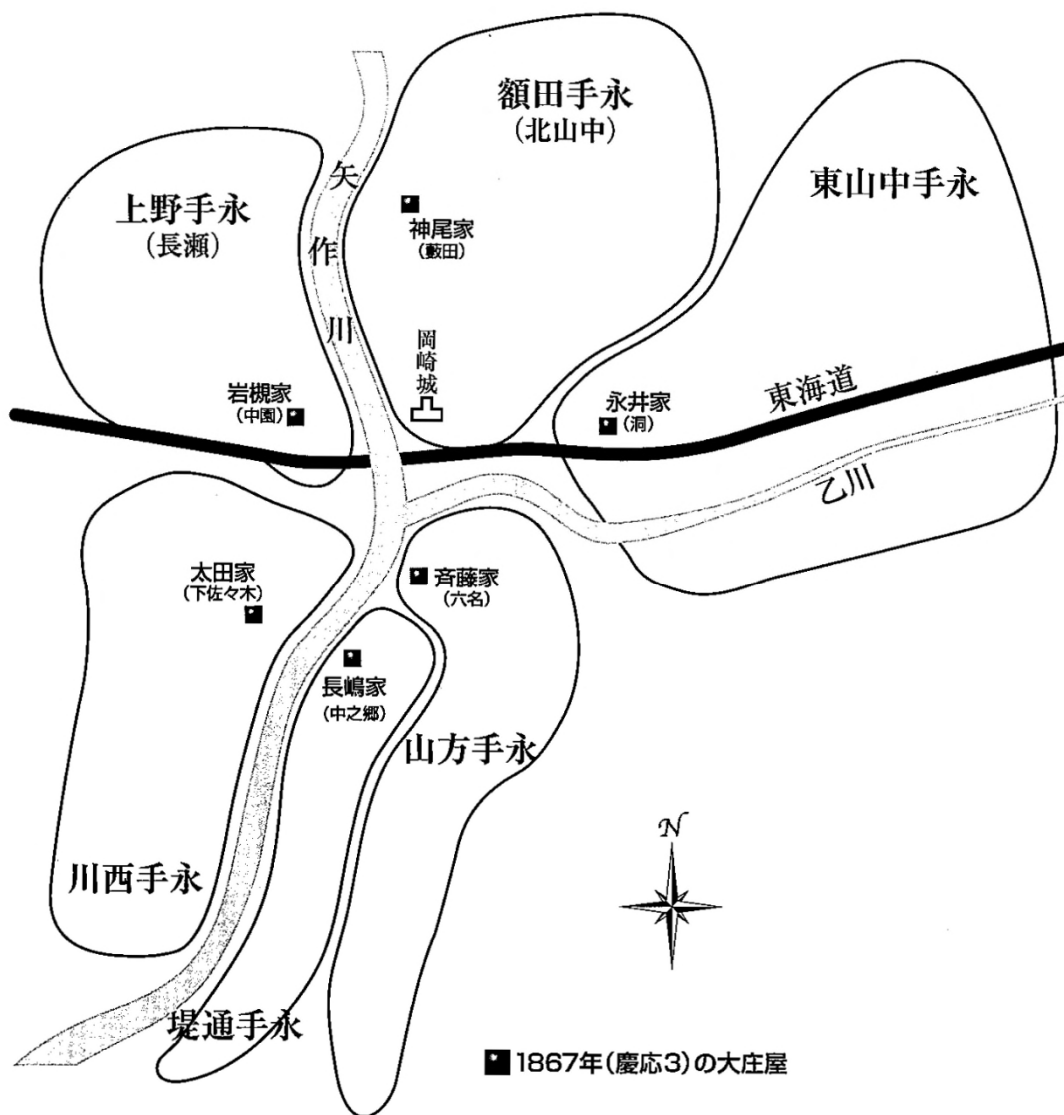


図1 手永配置図

手永配置図（『御田扇祭り調査報告書』岡崎市教育委員会,2013年,p4より転載）

第3回 山里の祭り

—額田地区に伝承されている祭りを中心に—

平成27年9月28日

1 額田地区の環境

(1) 地理的環境

① 山地

額田地区は、三河高原の西端に位置しており、海拔50～790[㍎]の間にある。額田地区の98[㍎]が山地であり、三河山地の傾斜を受けて、東から西または南西に向かって緩やかに傾斜している。額田東部には、標高400～600[㍎]の山々が連なっており、最東部には本宮山(標高789[㍎])が位置している。

本宮山から南西へかけて額堂山などの山々が連なり、これらの山々は、豊川市との市境になっているだけではなく、西三河と東三河を区別している。また、矢作川水系と豊川水系との分水嶺にもなっている。

② 地質

額田地区の地質は、領家帯を形成している変成岩類や花崗岩類などの古い基盤岩類と、その上に乗る新しい堆積層から成っている。概観すると、寺野^{きくだし}—木下^{せま}—^{んちよう}千万町を結ぶ線の南側には、変成岩類が広がり、北側には、花崗岩類が分布している。また、保久^{ほつきゆう}・小久田^{おくだ}・桜形^{さくらがた}などにも、一部変成岩類が見られる。

③ 河川

額田地区の河川は、すべて矢作川に流れ込んでいく矢作川の支流である。大きな水系としては、南部の男川水系と北部の乙川水系の二つがある。乙川は、巴山に源を發し、千万町・木下・桜形・^{かじの}鍛埜地域を流れている。男川は、本宮山に源を發し、^{まきばら}牧原・^{いしはら}石原・^{みょうけん}明見・^{あわぶち}淡渕・^{はら}原・^{かしやま}檜山を流れる。また、一部ではあるが郡界川の恩恵を受けている地域もある。

(2) 伝承地としての額田

額田地区を数年かけて歩いた中で、強く思ったことの一つに民俗事象の残存形態が比較的緩やかに推移しているように感じたことである。以下、伝承地としての魅力を紹介する。

- ① 男川水系の農業形態、特に石垣棚田の顕著な分布と遺構が多く残されている。
- ② 明治以降の植林によって林業が盛んである。

- ③ イノシシ・シカ・サルの被害と共生という点で、シシ垣の分布を通して考えることが出来る。
- ④ シイタケ山の恵みがムラ社会の存続に重要な役割を果たしていた。
- ⑤ 男川水系に天王信仰の拡がりが顕著に認められる。
- ⑥ 南部地域（男川水系）の祭りには神輿渡御が見られる。
- ⑦ 北部地域（乙川水系）には馬（牛）頭観音が濃厚に分布している。
- ⑧ 額田地区全域に数多く分布している農村舞台。中でも大型の回り舞台を持つ地域が北部に残されている。
- ⑨ 庚申信仰が南部地域に濃厚に残存している。なかでも細光町上組に伝承されている事例ではシマイ庚申で挿鉢を被るという儀礼を伴う。
- ⑩ 南部地域では、両墓制的遺構が多く見られる。
- ⑪ 北部地域では、イトウ墓、一人一墓、屋敷墓が顕著に見られる。
- ⑫ お祭り矢場の存在と地域での伝承形態が比較的きちんとした形で残されている。
- ⑬ 同族祭祀も行われている。
- ⑭ 特異な現象として、大代町・雨山町のみに残存しているコト八日行事。また、当（頭）屋祭祀（宮崎：オトウダイコン、石原：アマザケトウ）。さらに、現在大代町のみに残っている松飾りとしてのオニギを供える習俗を挙げる事が出来る。
- ⑮ 北部地域のみに残存している田の神（桜形町）の存在

2 山里の祭りの実際

(1) コト八日行事

コト八日とは、2月と12月の八日に行われる行事の総称であり、全国各地で様々な行事が行われている。2月8日をコトハジメ、12月8日をコトオサメと呼ぶ（地域によっては逆になる）。

愛知県内で現在もコト八日行事を行っているのは、北設楽郡と岡崎市大代町と雨山町の数ヶ所のみである。大代町と雨山町では2月8日のコトハジメに、田畑や山の仕事を開始するにあたり悪霊を3体の藁人形に憑依ひょういさせて、子どもがムラ境まで送る「オカタ送り」が行われている。

① 大代町の場合

2月8日のコトハジメの行事を「オカタ送り」と称し、3体の藁人形（殿様・姫・下郎）に悪霊を憑依させてムラ境まで子ども達が鉦、太鼓を鳴らし「ニガツヨウカノコトハジメ」と唱えながら人形を送り、大人は「オカタ送り」に合わせて正泉寺で百万遍の念仏を行う。

●当日の流れ

- ・ 15時30分：正泉寺集合。準備
- ・ 16時00分：読経・御祓い
- ・ 16時40分：オカタ送り開始
 鉦（1人）、太鼓（2人）、人形（3人）、御幣（1人）
 鉦1回、太鼓1回、「ニガツヨウカノコトハジメ」
- ・ 16時55分：ムラ境到着
 人形と御幣を置き、軽く拝み、急いでもと来た道を決して振り返らずに、寺まで言葉を発せずに帰っていく。「**振り返ると悪霊に取り憑かれる**」と言われている。
- ・ 17時10分：百万遍終了。後片付け。解散
 ※コトオサメ（12月8日）も昭和50年頃までは、行っていた。

② 雨山町の場合

雨山の「オカタ送り」（オクリゴト、送り神とも称していた）は、コシ（舟形のカゴ＝乗り物）に乗せた3体の藁人形【侍の大將、お供（船頭とも伝える）、1体は女性と決められている】を雨山ダムのオカタ場まで子ども達が鉦を鳴らし「ニガツヨウカノコトハジメ」と唱えながら人形を送る。

●当日の流れ

- ・ 14時50分：参加する子ども、親集合
- ・ 15時00分：読経、お参り。
- ・ 15時30分：オカタ送り開始
 鉦（1人）、コシに載せた人形（2人）、ハタ（2人）の順番に並び、「ニガツヨウカノコトハジメ」と唱え、鉦を2回鳴らしながら行く。
- ・ 15時55分：オカタ場到着
 到着するとオカタとハタを置き、手を合わせてお辞儀をし、その後は振り返らずに黙って帰る。
- ・ 16時20分：年長者が鉦を寺へ戻し終了
 ※参加者は、男子のみであったが、子どもが減り20年くらい前から女子も参加するようになった。

(2) 千万町神楽・雨山神楽

額田地区では千万町町（八劔神社）と雨山町（熱田神社）の2ヵ所で、祭礼に合わせて獅子舞神楽が奉納されている。いずれも獅子頭を付けた舞い方が女物の着物を着て、後持方しりもちが幕を持ち、囃子方の横笛、太鼓、唄に合わせて神楽を舞う形態で嫁（娘）獅子と呼ばれる。左手に御幣、右手に鈴を持って舞う「鈴の舞」と、獅子頭の幕を広げて舞う「幕の舞」が伝承されている。悪魔を喜ばせ、鎮魂、退散させ、

豊穰を祈り、幸せを引き寄せる舞である。千万町神楽は、昭和39年3月に愛知県無形民俗文化財に指定されている。

① 千万町神楽

- ・奉納される日：4月第3日曜日に実施される八劔神社春の大祭（かつては、4月16日に固定されていた）。10時30分頃奉納
- ・神楽の伝承：千万町はおよそ40戸、200人弱が在住している。荻野姓が多い。舞方や才藏（後持方）は父子相伝で伝承されていた。現在は、町民で構成する千万町神楽保存会によって継承
- ・文献に見られる神楽：宝暦年間（1751～61）に八劔神社祭礼で獅子舞が奉納された記録が現在のところ一番古い。
- ・若宮社への神輿渡御：金的も無事に上ると定刻とされる14時頃に、送り囃子が奏される中、若宮社へ神輿渡御となる。
- ・若宮社での神楽奉納：鈴の替りに各所に飾られている造花を持ち、観客とふざける掛け合いが入るため「ホラ入り」と言い、舞も「ホラの舞」と言われている。舞方も才藏も決められた装束は着けず法被などの姿で舞う。

② 雨山神楽

- ・奉納される日：熱田神社大祭（4月第4日曜日）を含め、年4回奉納される。
- ・神楽の伝承：以前は地元で神楽を舞っていたと言われる。久しく途絶えていた。昭和初めに復活。獅子頭をつける舞方、後ろでバチを持つシリモチ、囃子方（太鼓1、横笛2）で行われている。

(3) 夏山柿平下の天王祭祀

かつては、「提灯祭り」と呼んでいた。仮屋の祠を建てた後、子どもも参加して、花火などを行い、多くの提灯を結界縄などに付けて、それを各戸に持ち帰って飾り、祭りの夜は賑やかであった。現在は子どもも少なく、祭りとしての子どもの参加は無い。以下、仮屋造りの手順を記す。

- ① 13:00：ショウヤさんが挨拶の後、作業開始
- ② 旧祠を社守が塩で浄めて参拝
- ③ 神札を取り出した旧祠は皆で壊していく。祠の基本となるパーツは旧祠のものを写し取りながら竹を切り分けて行く。設計図は無い。
- ④ 作業は自然に役割分担され、年配者が細かな作業をし、女性は境内周囲の清掃
- ⑤ 旧祠の不要になった材を燃やす。その火で竹を炙り少しずつ曲げて祠の天井枠、一番下の基礎となる横の床枠を作る。
- ⑥ 竹の柱を建てる。旧祠と同じ柱穴に建てて行く。旧祠を基準として高さ等が平

行になるよう調整。

- ⑦ 祠の正面を除く三面に底枠を一段目として六段の横骨組を固定する。
- ⑧ 骨組の上にヒノキ葉を敷いて、その葉の上から骨組の竹とで挟み込み、紐で縛り固定する。
- ⑨ 屋根の飾りとなる竹を祠に取付ける。
- ⑩ 縄を準備。左縄で縛う。仮屋の注連縄1本。境内に張る結界用の細縄
- ⑪ 玉串や御幣の準備
- ⑫ 御簾や戸口の飾りを旧祠のものを見ながら作る。
- ⑬ 祠全体が出来上がって来た頃に、結界縄を境内に張り、それに提灯をぶら下げ、シデ（紙垂、四手）を取り付ける。※紙垂：吉田流、白川流、伊勢流
- ⑭ 神札（下が昨年、上が今年の札の2枚を重ねる）を納める。
- ⑮ 供物を供える。ショウヤさんが準備。塩、米、御神酒、野菜（ニンジン、ナス、ピーマン）
- ⑯ 社守による祝詞奏上
- ⑰ 最後に般若心経を皆で唱える。
- ⑱ ショウヤさんが挨拶をして終了
※ショウヤとは、神札を貰い受けに行く他、祭りの準備を行うイエ。毎年回りで行う。
※祭礼日は、7月15日に近い週末

（4）夏山八幡宮の火祭り

夏山八幡宮は古い歴史を持つとされ、伝承によると継体天皇の25年（532）7月24日、天津日子根命を奉祀し創建され、その後、元慶4年（880）8月24日に應神天皇、宗像三女神、住吉大神を合祀して王宮八幡宮と改称したと言う。また、火祭りに使用されたとする永禄元年（1558）銘のある獅子頭1頭が宝物として伝承されている。

夏山郷は平針、寺平、柿平、井之口、鬼沢、寺野の6カ村であったが、明治8年に井之口が柿平に吸収され、5カ村となる。現在、夏山八幡宮は夏山地区5集落の総氏神として180戸を氏子としている。

① 火祭り

火祭りは、夏山八幡宮の年4回行われる中祭の一つに位置付けられ、現在は旧暦9月9日に近い土曜日に実施している。夏山の5集落のうち、柿平と平針が1年交代で火祭りを担当する。

祭りの最大の見せ場は、「ソダ山」と呼ばれる生木の山に火を付けて、面を被った鬼と鬼の親あるいは師匠的な役を果たすババが様々な所作を行うところにある。その時、鬼が上手く所作が出来ないと、参詣者が囃し立て、鬼はソダ山から燃え

木を持ち、境内の参詣者を追い回す行動に出る。参詣者も負けずに「ボケ、ボケ」「バカ鬼、バカ鬼」と鬼を囃し、歓声を上げながら逃げ回り、鬼と一体となり盛り上がる。鬼の燃え木に打たれると厄除けとなり、その年は病気にかからないと言われる。参詣者も「**打たれに行く**」と言って祭りに参加する。

② 火祭りの流れ

- ・ 12時30分：「ソダ山」作り・・・境内
- ・ 12時30分：注連縄、鬼の装束作り・・・拝殿
- ・ 13時30分：太夫（3～5人）白装束に身を包み、水垢離
- ・ 14時30分：火熾し（火錐神事）
- ・ 16時00分：採火
- ・ 17時00分：祭式
- ・ 17時20分：神降ろし（平針地区が担当する時のみ行われる）
- ・ 18時20分：ソダ山点火

③ 所作

- ・ カマシヨ
- ・ 鬼追い
- ・ 獅子討
- ・ 相撲
- ・ 鈴の舞
- ・ 小刀の目利き
- ・ 薙刀の舞

(5) 当（頭）祭祀の実際

当（頭）祭祀とは、神社の祭りや講などに際し、神事や行事の世話をする人、またはそのイエのことを当（頭）屋と言う。その多くは1年交代で当（頭）を務め、選出は神クジあるいは家並順や帳簿などの記載に基づき輪番で行うことが多い。当（頭）屋が重要な役割を担い行われる神社の祭祀を当（頭）屋祭祀と言う。

① 宮崎神社「オトウの神事」（「オトウダイコン」）

旧暦11月1日に行う宮崎神社の神迎え神事を「オトウの神事」と言う。この神事において、神饌とするオシロジロ（粢）と輪切りダイコンの味噌煮＝オトウダイコンを準備する任にあたることをオトウと称す。オトウは毎年クジで選出される社守2名と、前年度社守を務めた2名の計4家族が当（頭）屋として務める。

ダイコンは各戸から2～3本集められ、神迎え神事の3日前から準備が始まる。ダイコンは、皮を剥いて長さ5寸（15[㍍]）の輪切りにし、真っ白のダイコンが味噌の味が沁みて真っ黒になるまで一昼夜かけて煮込む。その量は200～250切、大きなお釜2口と Hanson 1口を使用する。この行事は、宮崎神社の氏子全

体の行事ではなく、明見町のみの行事として行われている。

※平成27年は、11月22日（日）

② 石原町石座神社「神迎え行事」（「アマザケトウ」）

石座神社の神迎え行事は宮崎神社と1週間ずらして行われる。平成27年は、11月29日（日）に行われる。神迎え神事では、石座神社六座社【本殿四座の石座、日吉、稻荷、天照皇大神／猿田彦（消滅した田原坂にあった社）／山之神】にシロジロ（粢）とダイコン舟に白神酒（甘酒）を入れた特殊な神饌を献供する。神事に従事する者は、前日から境内にある石原集会所にてオコモリをして準備作業を行い、神事を中心となる者は、早朝に境内横の室合内川で禊を行う。

(6) 石座神社大祭（祇園祭り） 神輿渡御の例として

石座神社秋の大祭は、神輿の渡御に合わせて、盛大にお練り行列が行われている点が特色として挙げられる。各種幟や道具類は20種以上あり、行列における役割がある者だけでも50人以上となる。以下、お練りの内容を記す。

- | | |
|----------|----------|
| ① 塩播き | ⑰ 石座神社小幟 |
| ② 先払い | ⑱ 三社額面 |
| ③ 梵天（2本） | ⑲ 櫛持ち |
| ④ 太一大神宮幟 | ⑳ 笹踊り |
| ⑤ 大神宮御鉾幟 | ㉑ 鉾 |
| ⑥ 組幟 | ㉒ 傘鉾 |
| ⑦ 石座大明神幟 | ㉓ 正社守 |
| ⑧ 日吉神社幟 | ㉔ 御神輿回し |
| ⑨ 稻荷大明神幟 | ㉕ 大傘 |
| ⑩ 天満宮幟 | ㉖ 宮司 |
| ⑪ 金毘羅幟 | ㉗ 神官 |
| ⑫ 室合内御鉾幟 | ㉘ 御神輿付き |
| ⑬ 相野御鉾幟 | ㉙ 随行員 |
| ⑭ 賽銭箱 | ㉚ 拍子木 |
| ⑮ 燈籠 | ㉛ 打ち囃子 |
| ⑯ 五色幟 | ㉜ 交通整理 |

(7) 祭礼と矢場

額田地区を訪ねると、矢場が設けられている神社を数多く見ることが出来る。矢場の射小屋には所狭しと、多くの金的奉納額が掲げられている。金的奉納額は、額田地区全体で500程確認できる。宝暦9年（1759）の額が最も古い。

この地域では、現在も3人の弓の師範がいて、後進育成や祭礼弓が行われる矢場

の維持管理などに取り組んでいる。流派としては、大和流、日置流^{へき いんさい}印西派、日置流^{せいか}雪荷派が継承されている。

神社の祭礼に弓射の奉納が行われることを「お祭り弓」、またその場所を「お祭り矢場」と称し行われている。弓・矢は古くから武器としての道具だけでなく、霊的な力を持った呪具としても用いられ、魔を祓い神意を占う機能を有する。五穀豊穡や村中安全、無病息災、子孫繁栄などを願うムラの祭礼において、金的（悪魔の眼を象徴すると言う）を射落とすことで厄難を取り除くことが出来ると信じられている。そのため、金の中しなければ厄払いが済んでないとされ、祭礼のお練り行列が出立できないとされることも多い。

(8) 農村舞台

三河山間部は、信州と共に、農村舞台の文化圏を形成していた。額田地区にも江戸から昭和にかけて建てられ、使用された農村舞台が存在している。男川水系で現在も舞台が確認できるのは8カ所、乙川水系では、9カ所である。ただし、大型の舞台で回り舞台を有しているのは、乙川水系に存在している。

① 豊楽座

大高味町の大川神明宮の社殿に向き合って建っている。豊楽座称し、明治・大正・昭和にかけて地域に親しまれてきた農村舞台である。築造は、明治15年5月25日

●舞台の構造

- ・間口10.9^尺、奥行9.08^尺、高さ10.9^尺の入母屋造りである。茅葺の舞台。舞台内部は、直径6.18^尺の回り舞台を持っている。回り舞台の構造は、床下で操作をする方式を採っている。床下に22個の木車付の皿回し式の台座を組み、盆の背面4カ所に腕木が取付けてある。
- ・太夫座、花道が残っている。
- ・セリは天井から奈落まで上下する大セリが存在した。

●豊楽座の復活

- ・大正11年には、市川団吉が上演している。
- ・昭和11年には、一角春雄らが上演している。
- ・舞台を最後に使用したのは昭和30年である。
- ・平成2年復活公演
- ・平成14年文楽公演
- ・平成16年東面茅葺屋根葺き替え。

② 鳳凰座

保久町保久八幡宮の拝殿向って左側に建てられている。明治27年に改築され、昭和62年屋根葺きと周囲、上部トタン、下部板張りの修復が行われた。鳳凰座

と称し、明治29年に奉納された鳳凰座と染め抜かれた幕が現在も大切に保管されている。昭和30年代以降は、舞台も使われなくなった。平成16年には、舞台を利用して、鳴子踊りを披露した。

●舞台の構造

- ・間口14.5尺、奥行9.0尺、舞台高さ0.67尺（玉石上）、回り舞台直径6.3尺
- ・切妻造り瓦葺
- ・左右には、太夫座が残っている。
- ・皿回し式回り舞台

写真資料



大代コト八日「オカタオクリ」



雨山コト八日「オカタオクリ」



大代コト八日 ムラ境に置かれたオカタ



雨山コト八日 ムラ境に置かれたオカタ



千万町「嫁（娘）獅子神楽」



千万町神楽「ホラの舞」



雨山「嫁（娘）獅子神楽」



夏山柿平下天王祭祀「仮屋造り」



夏山柿平下天王祭祀「社守祝詞奏上」



夏山八幡宮火祭り「火鋸」



夏山八幡宮火祭り「鬼追い」



宮崎神社「オトウダイコン」



宮崎神社オトウ神事に供えるオトウダイコン



石座神社アマザケトウ「ダイコンの舟」



石座神社猿田彦に献供された特殊神饌



石座神社大祭



石座神社大祭「笹踊り」



金的的中



大川神明宮農村舞台



回り舞台の構造

第4回 田遊び

ーデンデンガッサリ・瀧山寺鬼祭りを中心にしてー

平成28年1月25日

1 田遊びとは

新年に行われる豊作祈願の予祝行事の一つ。御田、田祭り、庭祭り、庭田植えなどとも呼ばれている。寺院の修正会に伴って行われてきたものも数多く存在する。

年の初めに神仏の御前で、模擬的に一連の農作業を演じ、豊作を祈念する芸能で、これは田楽の演目に含まれているだけでなく、単独の行事としても行う所が多い。愛知県では、田楽と同様に新年の行事として三河を中心に現在も6カ所で伝承されている。僅かながら尾張(2カ所)でも確認できる。

田遊びが、文献に登場するのは、伊勢神宮の記録である「皇太神宮儀式帳」(延暦23年・804)には、内宮と外宮で墾り初めの時に神田の隅を鍬で打ったことが記され、「皇太神宮年中行事」(建久3年・1192)に初めて「田遊」の用語を見る事が出来る。

(1) 田遊びの分布

単独で田遊びを伝承しているのは、三河では、豊川市の砥鹿神社・菟足神社・財賀寺、岡崎市山中八幡宮・瀧山寺、西尾市熱池八幡社の6カ所。尾張では、名古屋市中区岩塚の七所社、津島市の津島神社の2カ所。田楽を含めると愛知県内の田遊び芸能は、現在でも12カ所で伝承されている。

(2) 東海地方の呼称

- ① 御田
- ② 御田植え祭り、庭祭り
- ③ 春鍬
- ④ 春田打ち

(3) 代表的な田遊び

- (ア) 板橋の田遊び・・・東京都板橋区
- (イ) 藤森の田遊び・・・静岡県焼津市
- (ウ) 蛭ヶ谷の田遊び・・・静岡県牧之原市
- (エ) 滝沢の田遊び・・・静岡県藤枝市
- (オ) 三島大社のお田打ち・・・静岡県三島市

(カ) 小國神社の田遊び・・・静岡県周智郡森町

2 田楽とは

平安時代中期に成立した日本の伝統芸能。楽と躍りなどから構成される民俗芸能の一つである。

(1) 田楽の歴史

田植えの前に豊作を祈る田遊びから発達したと伝承。渡来系のものであるとも言われ、不明な部分が多い。

(2) 三河の田楽

- ① 田峯田楽：田峯観音の祭りとして、毎年2月11日に奉納
- ② 鳳来寺田楽：鬼を供養する修正会として始まったと伝承。現在正月3日に田楽だけ独立して奉納。能など27番の曲を演ずる。
- ③ 黒沢田楽：俗に「墨付け田楽」あるいは「墨塗り田楽」と言われ、毎年2月第1日曜日に行われています。37番の曲を演ずる。

田峯田楽：昼田楽・夜田楽・朝田楽に分かれ演じられている。

昼田楽：8：00～10：00 神楽的要素を持つ舞。「扇の舞」「膳の舞」「湯桶の舞」「萬歳楽」「仏の舞」

夜田楽：16：00～20：00 豊作を祈願する予祝神事の田遊び。檜の幣串2本の間に鏡餅を「しきみ」の葉を挟んで「こうぞ」の皮で4ヶ所縦結びにしたモノを鉾に見立てて演ずる。「日選び」「堰さらい」「種選び」「雇人」「田打ち」「代播き」「代均し」「芽づら取り」「大足」「靱蒔き」「おしずめよなどう」「烏追い」「雇人」「芝刈り」「田植え」

朝田楽：21：00～22：00 田楽芸能。「庭固め」「火伏せ」「ちらし棒」「ろん舞」「あたま惣田楽」「から輪惣田楽」「殿面」「女郎面」「爺面」「駒」「獅子」「三拝・閉扉」

3 山中八幡宮「デンデンガッサリ」の実際

(1) デンデンガッサリの伝承

デンデンガッサリは、正月3日に山中八幡宮の御田植え祭りとして行われている。田遊びの歌詞の始めに「デンデンガッサリヤー」という詞があるところから、「デ

ンデンガッサリ」と呼ばれるようになったと伝える。

東海地方には、この種類の田遊びが多く分布する。田遊びは、その年の稲作の豊作を予祝するために、田作りの過程を模倣的に演技するものである。

(2) デンデンガッサリの行事次第

- ① 太鼓の乱打
- ② 田ごね
- ③ 前歌
- ④ 後歌
- ⑤ 弁当
- ⑥ 前歌
- ⑦ 後歌
- ⑧ 稲刈り
- ⑨ 運搬
- ⑩ 餅投げ



(3) 道具・準備するもの

- ① 弁当：白米4^キを年行事が炊き、櫃に入れる。
- ② 大鏡餅（稲）：下段11白、上段9白。
- ③ 丸餅（鎌）：14個(奉仕者分)+数個
- ④ 太鼓（田）：1個
- ⑤ 牛角・手綱：それぞれ1個
- ⑥ 注連縄1式：拝殿用

(4) 役名・扮装

- ① 太鼓打ち（神官）：2人＝白装束
- ② 歌い出し（音頭）：1人
- ③ 歌い手（衆）：11人
- ④ 牛：1人
- ⑤ 年行事：若干



(5) 歌詞・台詞・所作

- ① 前歌
デー、デー、ガッサリヤー、

パッチキヒライテ ガッサリヤー

② 後歌

是カラ越テエエ

松阪越テサッサノサイ 松坂越テ ヤレ伊勢踊リ 伊勢衆ノクセニャアア

4 瀧山寺鬼祭りの実際

(1) 修正会鬼祭り当日のタイムスケジュール

平成27年2月21日(土) ※括弧内は、調査者(野本・山口)の付け加え

- ① 8時30分 集合：冠面者、進行係(本坊に集合)
- ② 8時40分 着替え：冠面者(和服に着替え)
- ③ 9時20分 手拭作成：冠面者、進行係(1反より9枚取り=1.05反、5反、計45枚作成)
- ④ 10時00分 水汲み：冠面者、進行係、棒突(4名)(青木川へ風呂の水汲みへ向う。バケツ3個用意)
- ⑤ 10時10分 風呂の準備：冠面者(祖母面者が火付けを行う)
- ⑥ 10時30分 風呂入り：冠面者(祖父→孫→祖母の順に入る)
1回目の迎え：大役、進行係(十二人衆の宿へ迎え)
- ⑦ 11時30分 2回目の迎え：大役、進行係(十二人衆の宿へ迎え)
- ⑧ 11時45分～12時30分 冠面者昼食：大役、御前(現在の山田住職)、進行係(冠面者昼食の接待を行う)
- ⑨ 13時00分～14時00分 火祭りリハーサル：冠面者、手引き、若衆、常チャレ(パンツ、股引き、足袋、手拭、誓約書を配布する。足袋、股引き、法被等借用品の返却を説明する。松明引換券を渡し、17時00分に松明と引換える)
- ⑩ 14時00分 着替え：冠面者、大役、若徒(行列用に着替えを行う)
- ⑪ 14時30分 3回目の迎え：大役、進行係(十二人衆の宿へ出迎え)
仁王門へ送迎：冠面者、御前、若徒、棒突(組長)(タンキリ飴、三宝、箱提灯、十二人衆杖、大団扇持参)
- ⑫ 15時00分 登山行列出発：大団扇、若衆(大松明)、棒突、大役、若徒、長刀、12人衆、冠面者、僧侶、箱提灯、棒突(行列出発してからタンキリ飴配布)
- ⑬ 16時00分 本坊到着、十二人衆接待：大役、御前、進行係(本坊にて十二人衆の接待を行う)
- ⑭ 16時30分 棒突、火消、箱提灯担当者集合：棒突(9名)、火消(9名)、箱提灯(4名) (法被着用、点呼、役割説明一副総代)
- ⑮ 17時00分 本堂へ出発①：十二人衆、大役、進行係、棒突(6名)、火消(9

名)、箱提灯(2名)

- ⑩ 17時15分 十二人衆本堂到着:梵鐘突き(コツボネ)、牛木引上げ(火打ち)、大御幣仮固定
本堂へ出発②:御前、若徒、冠面者、僧侶、棒突(3名)、箱提灯(2名)(本堂階段下で待機)
- ⑪ 17時17分 十二人衆1回目の呼出:十二人衆、大役、進行係、箱提灯(2名)、棒突(6名)(十二人衆整列)
- ⑫ 17時25分 十二人衆2回目の呼出:十二人衆、大役、進行係、箱提灯(2名)、棒突(6名)(十二人衆整列)
- ⑬ 17時30分 冠面者本堂へ入堂:御前、若徒、冠面者、僧侶、棒突(3名)、箱提灯(2名)(階段下の待機者は、十二人衆退去後、舞台正面より入堂する。僧侶の紹介)
- ⑭ 17時33分 十二人衆3回目の呼出:十二人衆、大役、進行係、箱提灯(2名)、棒突(6名)(十二人衆整列、登場後、大御幣建て)
御前登場:御前、若徒、棒突(3名)、箱提灯(2名)
仏前法要開始:大役、冠面者、若徒、僧侶(本堂へ入堂)
- ⑮ 18時15分 御礼振り:十二人衆、進行係、箱提灯(2名)、棒突(4名)、松明2本、火消(3名)(舞台正面より東回廊から日吉山王社、東照宮から籠所へ戻る)
- ⑯ 18時30分 鬼塚供養:大役、御前、若徒、僧侶、冠面者、箱提灯(4名)、棒突(3名)
豆・タンキリ飴蒔き:御前、冠面者(鬼塚供養が終わり次第、舞台より行う)
- ⑰ 18時45分 大松明点火:進行係、棒突(2名)、箱提灯(2名)、火打ち役、十二人衆、棒突(4名)、火消(9名)(火打ち役が内陣へ灯明から火種を移す)
- ⑱ 19時00分 庭祭り(田遊祭)開始:十二人衆、棒突(6名)、御前、若徒、箱提灯(2名)、棒突(3名)(棒突6名は、舞台ソデで、通路確保。棒突3名は、本堂にて待機)
- ⑲ 19時35分 御燈明取り:進行係、棒突(2名)(灯明で松明点火)
- ⑳ 19時45分 火祭り開始:大錫杖、錫杖、子ども松明(10本)、松明(20本)、祖父面、祖母面、孫面、棒突(3名)、火消(3名)(火消6名で大松明消火、場内消灯-2回目西次郎が終われば消灯。東西欄干角に棒突各1名、内陣1名、火消3名配置)
檀家総代の拍子木で終了:場内点灯(照明係へ合図)
- ㉑ 20時00分 解散:法被、棒、箱提灯を本坊へ返却し解散
上記タイムスケジュールの括弧内に記録者の簡単なコメントを記録しておいた

が、以下ポイントのみ詳しく記録をする。

(2) 十二人衆の働き・役割

① 十二人衆とは

昔、滝地区に十二谷（集落）があり、谷の代表を十二人衆といったと伝承されている。この流れを受け継いでいるのが現在の十二人衆である。十二人衆は、もともとは世襲制であったと言われている。この制度は崩れる傾向であるが、現在も代々受け継いでいるイエも存在している。

鬼祭りは、十二人衆が主体となって執行される。江戸時代3代将軍家光によって東照宮が造営され、その後、安全祈願のために鬼祭りの復活の命が下った。これによって宇追ノ狭間に「祭り田」として2反5畝歩が与えられ、これを十二人衆で耕作し、その収穫をもって祭り執行の費用に充てたと伝えられている。

十二人衆は、鬼祭り執行のためには、重要かつ中心的な役割を担っていたと思われる。瀧山寺が、十二人衆を饗応するのに七度半（八度目に途中で出会う）の迎えを立てたと伝える。その際上役（東次郎・西次郎・コツボネ・福太郎・火打ち2人）6人は袴を着用し、下役（青モクサ）6人は羽織・袴を着用したといわれている。

現在は、寺からの迎えは3回行い、服装は、十二人衆の衣装を着けて饗応を受ける。庭祭り（田遊び）でのコツボネ・福太郎の呼び出しでもそれぞれ3回呼ばなければ出てこないのもその現れと思われる。

十二人衆は、鬼祭りを執行するに当たり、以前は、宿で旧正月元旦から7日間、女性を避けて、男性のみで精進潔斎をしたといわれている。現在は、宿（成瀬建設の旧事務所）で前日と当日の2日間、男手で精進潔斎をするように変わって来た。

十二人衆の役

・長刀・・・東次郎

・長刀・・・西次郎

上役

・コツボネ・・・十二人衆の代表。鬼祭り執行責任者

・福太郎

・火打ち・・・・・・2名

・青モクサ・・・6名

下役

- ② 十二人衆の仕事（平成26年度の調査記録、平成27年2月15・20・21日の調査・観察記録と『鬼祭りと十二人衆』中根武夫 平成10年5月5日より）
『鬼祭りと十二人衆』の著者中根武夫さんは、十二人衆の一人として、長く鬼祭りの伝承・記録に努力された方である。詳細な記録は、ご自身でコツボネ役等を長年務め、伝えてきただけに説得力がある。この成果を息子さんの中根守久さん

がしっかりと受け継いでいる。庭祭り（田遊び）の「旧正月七日修行 鬼祭歌之覚」も中根武夫さんが昭和59年1月改記されたものが現在、原本として引き継がれている。

● 大御幣づくり

コツボネ役があらかじめ美濃和紙50枚購入し、4つ切りにして使用する以前は、大御幣をすべて新しくしていたために大半の美濃和紙100枚を4つ切りにして使用した。現在は、雨等で大御幣が傷むか、大御幣の芯が破損したとき以外は、毎年大判和紙50枚を使用して、御幣を200程取り替えていく。年は、大御幣の芯の破損により、2本（東西に設置）の御幣を23年ぶりにすべて新しくした。1本の大御幣に御幣400枚が十二人衆の手によって心を込めて新しくされた。併せて800枚の御幣を新調した。長さは3尺程である。

● オンベづくり

大御幣の先端に飾り付ける七草のことをオンベと称す。七草は、榊の枝（長さ約45センチで2本）、黒松・赤松（長さ約20センチ、実生の松 各2本）、笹（長さ約20センチ2本）、シダ（なるべく小さいもの2本）、ヤブコウジ（2本）、ヒトツバ（2本）、ノキシノブ（2本）である。これは、本堂境内周辺で火打ち役の2人で東西に立てる大御幣の上にセットするために必ず2セット用意する。

七草は、榊の枝を除く6種類をオンベの巻紙で巻き、裂いた藤蔓で縛ったものを榊の枝に十字（横）に結び付けて大御幣の先端の竹に差す。

● 大松明用御幣づくり

大松明用御幣は、大御幣の紙の半分（大判の八つ切りの大きさ）にして、大御幣と同じ要領で2枚裁ち、本堂前東西の据える大松明につける。

● 牛木用御幣

牛木用御幣は、大松明用の紙をさらに半分にした大きさの紙で、同じ要領で2枚裁つ。牛木も東西大御幣の根元の部分に置くために2セット作る。

● オンベの巻紙づくり

オンベの巻紙は、牛木用御幣と同じ大きさの和紙で細かく切り込んで使用する。

● 大松明の縛り縄巻紙

大松明用御幣と同じ大きさの和紙で幅4センチの紙を24枚（閏月の年は26枚）作る。

● 牛木作り

幹の太さ、周り約15センチ、長さ約130センチの黒松と赤松を2本、ヤマから伐り出し、顔・角の形に切り揃える。顔の部分に錐で穴をあけ、切り払った枝で約10センチの横木（これが鼻環）を作ってこれを穴に通す。この横木と角の部分に裂いた藤蔓で結び、しおり縛りにして、牛木用の御幣をそれぞれ1本ずつ角

の部分に縛りつける。近年は、三浦さん（ご勇退）が一手に引き受けて作成している。（昨年、火打ち役の中根恵広さんが担当）

● 松明作り

大松明作りが、十二人衆の作業の中で最も人手を要し、全員が力を合わせなければ出来ない作業である。昨年の大松明作りの場面を再現しておきたい。

－材料－

丸竹：太さ 並 長さ 3. 0 3 寸（10尺）20本用意

細竹：直径3. 5 寸 長さ3. 0 3 寸（10尺）10本用意

松割木：大松明1本につき6 7. 5 貫（18貫）、2本分で1 3 5 貫（36貫）を用意。重さは、竿秤で正確に量られる。

－作り方－

あらかじめ準備をしておくものは、まず丸竹の中で、真直ぐで丈夫なものを4本選び出しておく。これを大松明の心（芯）にする。続いて、丸竹を竹割器で割裂く。角材（盤木）4本、間隔をおいて並べる。さらに、編み縄の6 寸（4尋）を4本、5 寸（3. 3尋）を2本、4. 5 寸（3尋）2本と仕上げ縄（3. 5分縄）1 2 寸（8尋）を8本、1 0. 5 寸（7尋）を6本、9. 7 5 寸（6. 5尋）を6本、9 寸（6尋）を4本（閏月の年は6本）を用意しておく。

次に大松明の外側の**簀子（大松明の皮と称している）編み**が始まる。縄で竹を編む者と縄の先端を持ってヨリをかける者が、角材（盤木）の位置で向き合い4組に分かれて簀子を編む。最初に、別に選び出しておいた細い**丸竹（心竹）**1本にあらかじめ太さに応じた長さの3分縄で一ヨリし、別の者が、簀子の幅の広い方から割竹を差し込んでヨリをかけ、順次割竹を差し込んで編む。途中松明を丈夫にするため、細い丸竹を3本ぐらい入れる。予定の幅になったところで選び出しておいた細い丸竹を使用して編み終わる。簀子の大きさは、幅の広い方が1 8 2 寸（6尺）、狭い方は、1 4 1 寸（4尺7寸）とするといわれている。同じ手順で簀子を2枚編む。

簀子を2枚編み終わったところで、いよいよ大松明作りに入る。簀子の幅の狭い方から3分の2ぐらいまで、竹枝5束縛り縄を解いて、枝の根を幅の狭い方にし、残りは適当に置く。

次に簀子の幅の広い方へ松割木6 7. 5 貫（18貫を竿秤で量る）を入れる。竹枝と松割木を配置し終わると、簀子編みと同じように両方に分かれて向き合い両方から心竹を持って簀子を丸めるように持ち上げて心竹を合わせ、編み縄の余りの部分で心竹を潜らせて縛り、松明のように丸くする。

松明の形に整えて、**仕上げ縛り**にかかる。まず、編み目の箇所4カ所を、

あらかじめ長さを決めて準備してある3.5分縄を二重にして2周させ、心竹を潜らせて仮縛りをしておく。次に、太い方から編み目の3カ所の間は、それぞれ4等分し、細い方の編み目を1カ所の間は、3等分（閏月の年は4等分）にして、編み目の箇所と同じ要領で、仕上げ縄で縛る。順次締めると緩むので、初め仮縛りとし、順次締めていく。最後はしおり縛りにする。仕上げ縛りは、12カ所（閏月—3年に一度の年は13カ所—）にする。最後に太い方の部分に松割木の詰め直しと、細い方の竹枝の切り揃えをして大松明作りは終わる。

大松明が出来上がったところで、軽トラックに積み込んで本堂正面の集水枡の位置まで運び、太い方の部分を向き合わせ、しおり縛りを上にして、又木で斜めに据え付ける。据え付けが終わると、しおり縛りの部分に4センチ幅の和紙を巻き、糊で止める。最後に仕上げ縛りの余った部分を切り揃えて、大松明用の御幣を1本ずつ、一番太い部分の仕上げ縄の上部に縛り付けて大松明作りの作業は終了する。

平成28年は、行列用の大松明も作り変えるということで4本の大松明を作る予定であると聞いている。大変な作業と材料調達が大変であることが予想される。

この他に、点火用のジン（付け木）割りをし、火打ち役のひとが持ちやすいように縄または藤蔓で縛る。

作業が終了すると、本堂仏前に全員集合し、賽銭箱の上に御神酒・洗米・塩を供え、仏前で準備終了の報告と鬼祭りの無事執行を祈念してお参りをする。その後、御神酒・塩で外陣の四隅の柱・格子・大御幣・大松明をそれぞれ浄め、前日の作業・準備を終える。作業を終えると十二人衆は、宿に帰り、炊事係2人は、炊事を行う。以前は、宿で風呂も沸かし入っていた。現在は、食事、練習、打合せのみで、泊はしていない。

③ 宿での生活（平成27年2月20・21日の調査・観察記録より）

● 十二人衆の食事

炊事は、前日の昼食、夕食および当日の昼食の3食としている。前日と当日の朝食は各自、自宅で自炊をする。

賄材料3食分を以下に記す。

白米・・・5 粍
味噌・・・2 粍
豆腐・・・10 丁
アゲ・・・25 枚
ネギ・・・4 粍
ムキミ・・・2 粍

刺身・・・12人分
清酒・・・2本（1.8割）
タクワン漬け・・・3本
茶・・・1袋
茶菓子・・・適量

● 練習

炊事の係以外の者は、庭祭り（長刀振りは屋外、三門の下で）の練習を行う。特に歌の練習は、念入りにする。また、コツボネ・福太郎の所作と文言のあわせと呼吸を何度も確認していた。

● 入浴

以前は、風呂も宿で入っていた。前日の夕食後（当日は、昼食後）に長刀振り（東次郎または西次郎）から順次入浴する。入浴も大事な行事の一つとして大事にされ、全員が入ったとされていた。現在は、それぞれが自宅で風呂も入り、浄めてくる。

● 火祭りに至るまでの十二人衆の動き

十二人衆の衣装替えをし、3回目の迎えを待つ。

- ・コツボネ、福太郎、火打ち（2名）の衣装：縺子模様尾長鳥棧留縹帯手掛
- ・東次郎、西次郎：黒天鷲絨胴服赤地金襴股引
- ・青モクサ（下役6名）：素袍小烏帽子 ※天明2年の史料にも同様な記載

ア 十二人衆の迎え

大役は、3回目の迎えの時は袴を着用し、大小の刀を差して迎えの挨拶をし、十二人衆の準備が整うと、十二人衆と共に宿を出発し、仁王門へ向かう。

イ 行列

15時20分ごろに関係者は仁王門へ集合し、15時30分に仁王門を出発する。

ウ 行列の順序

棒突・大役・長刀・コツボネ・福太郎・青モクサ（太鼓）・若徒・僧侶・冠面者・棒突の順である。この行列の前に2本の大松明が近年復活した。若い衆30名余が若いエネルギーを発揮している。その時に、「瀧山寺鬼祭りの唄」が歌われる。以下記しておく。

- 1 見たかなア 聞いたかヨー 五穀の祈り ヤレヤレー
今もなア 輝くヨー 鬼祭りよ
- 2 滝のなア 仁王門ヨー いつ来て見てもな ヤレヤレー
逆さなア 垂木はヨー まだ知らぬよ

ホラホイ ホラホイ ホラホイ

- 3 めでたなア めでたのヨー 若松様はよ ヤレヤレー
 枝もなア 栄えてヨー 葉も茂るよ
 ホラホイ ホラホイ ホラホイ
- 4 滝もなア 開けたヨー 滝壺淵はよ ヤレヤレー
 薬師なア 如来のヨー 御出ましたよ
 ホラホイ ホラホイ ホラホイ
- 5 親はなア 無くともヨー 子は育つよ ヤレヤレー
 祖父となア 祖母とのヨー 愛の孫はよ
 ホラホイ ホラホイ ホラホイ
- 6 お前なア 百までヨー わしゃ九十九までよ ヤレヤレー
 共になア 白髪 of ヨー 生えるまでよ
 ホラホイ ホラホイ ホラホイ
- 7 薬師なア 如来とヨー 山王様はよ ヤレヤレー
 八百なア 余年のヨー かが高いよ
 ホラホイ ホラホイ ホラホイ

・ **十二人衆の饗応**

行列が本坊へ到着すると、十二人衆は、別室へ案内され、御前（住職）と大役から挨拶を受けた後、御膳で酒食の饗宴を受ける。

献立は、皿（柿酢あえ）、坪（ヤマクチナシ）、平（生揚げ）、猪口（叩きゴボウ）、大引（ゴボウの筏揚げ・アオノリ）、酒、飯、汁である。

十二人衆以外の者は、大役以下それぞれ本坊で食事をする決まりになっている。

・ **本堂への登山**

十二人衆は、17時、棒突きの先導で大役と共に本坊を出発し、本堂へ登山する。

大役は、本堂へ入り、十二人衆の代表のコツボネは、鐘楼で鐘を突く。本坊では、この鐘の音を聞いて拍子木を打って応え、御前（住職）を始めとする僧侶が本堂へ登山する。

・ **登山後の儀礼**

十二人衆の内、火打ち役2人は、本堂表坂55段下に置いてある牛木を引き上げ、金柵の中の石灯籠の根本へ納める。

御前が本坊を出発すると、大役は、時期を見計らって本堂外陣の正面へ出て提灯を高く掲げ、十二人衆に声を掛ける。

十二人衆はこの時、大松明前に2列に整列し、大役の呼びかけに応える。

大役 「谷の衆 行儀をよくなされ 追っ付け御前のお着きでござる」

十二人衆 「エー」

十二人衆が応えると大役は、内陣へ入り、十二人衆は籠所で待機する。暫くして、御前（住職）一行が本堂へ到着すると、大役は外陣へ出て提灯を掲げ、十二人衆を呼び、十二人衆は前と同じように正面を向いて整列し、これに応える。

大役 「谷の衆 行儀よくなされ ただ今御前のお着きでござる」

十二人衆 「エー」

十二人衆が応え終わると、大役・十二人衆はそれぞれ元へ戻る。暫くして大役・十二人衆は、三度前回と同様に現れ、呼び、応える。

大役 「谷の衆 行儀をよくなされ ただ今御前のお出ましでござる」

十二人衆 「エー」

この時、御前（住職）は、若徒（小姓）を従え、外陣の正面へ出て十二人衆に 会釈をする。十二人衆は、御前に一礼すると直ちに二手に分かれて大御幣の所へ行く。

- ・ **大御幣立て**

十二人衆 「御祝」

と言って大御幣を立て、火打ち役が大御幣に打ち火をする。大御幣は金柵に縄で縛りつける。

御前（住職）一行は、再び内陣へ入り、法会を始め、十二人衆は籠所へ戻る。

- ・ **御礼振り**

17時50分頃十二人衆は、提灯・棒突・松明の先導により本堂裏の日吉山王社へ行き、東次郎・西次郎による長刀の御礼振りが行われる。その後、滝山東照宮の御神前においても同様に御礼振りをする。御礼振りの所作は、庭祭り（田遊祭＝田遊び）の長刀振りと同様である。御礼振りが終わると十二人衆は籠所へ戻る。

- ・ **鬼塚供養**

18時頃、法会半ばにして、棒突・箱提灯の先導で御前（住職）は、若徒を従え冠面者も随行して鬼塚供養の作法を行う。

鬼塚供養が終わると、御前（住職）たちは内陣へ入り、法会を続ける。

- ・ **大松明に点火**

法会の途中、鐘（中鐘）を合図に十二人衆の内、火打ち役が内陣へ入り、仏前の灯明からろうそくへ火を移し、提灯で大松明のところまで運ぶ。十二人衆は、あらかじめ準備してある松のジンにろうそくから火を移し、燃えるジンを大松明の松割木の間差し込んで大松明に点火する。

昔は、この大松明の明かりで庭祭りを行ったと傳承されている。

火消し役は、大松明が燃え過ぎないように藁の刷毛で水をつけて、燃え

具合を調整する。

・ 庭祭り

19時仏前法要が終わると御前（住職）は若徒を従え、外陣の正面へ出て着座する。

この時、一山の僧侶の一人（昔は年行司）は、外陣の賽銭箱の上に登る。十二人衆の火打ち・青モクサは南天の木の杖を持って本堂正面の通路を挟んで東西に分かれ、向き合って配置につく。

※「 」の文言の後に字体を変えて記してあるのは、場面の観察記録である。中根守久さんの聞き取り調査及び中根武夫著『鬼祭りと十二人衆』を参照・引用した。

僧「西東次郎、オーン ソーウ ソーウ ソーウ」と呼ぶ。

暫くして、

僧「オーン ソーウ ソーウ ソーウ」

十二人衆の一人（火打ち）が東次郎を迎えに行く。東次郎が出る頃、

僧「オーン ソーウ ソーウ ソーウ」と3回目を呼ぶ。

東次郎は、胴服を着て、右手に長さ2尺余、重さ12匁の長刀を持ち、左の腰に扇子を差し、左手を腰に当てて籠所を出て、大松明の間から正面に進み、舞台に上る。舞台の前方で止まって長刀の石突きをつけて、御前（住職）に一礼し、左手にて腰に差している扇子を右斜め前へ投げる。火打ちはこれを拾い、後で東次郎に返す。東次郎は、扇子を投げた後、斜め右に向いて右足を半歩踏み出しながら長刀を振り下ろして切る所作をする。次に斜め左を向いて左足を半歩踏み出しながら長刀で切る所作をする。続いて正面を向いて右足を半歩踏み出して正面を切る。切り終ると正面を向いたまま長刀の刀を左にして横に構え、長刀を右回しに7～8回廻して長刀を左手に持ち替え、刃先の方から腰にとって7～8回廻して腰に取る。この所作を3回繰り返して東に向きを変え、横に摺り足で長刀を廻しながら右へ数歩進み、次に左へ進んで長刀を腰に取って再び右・左へと動きながら長刀を廻す。これを3回繰り返し、最後に正面を向いて廻した後、石突きをつて一礼する。

僧「^{しんびょう}神妙」

振り終ると長刀を右手で立て、左手を腰に当てて左に廻って舞台を降りて籠所へ戻る。東次郎の長刀振りは、東の悪魔祓いを意味するものである。

僧「西東次郎オーン ソーウ ソーウ ソーウ」

暫くして

僧「オーン ソーウ ソーウ ソーウ」

十二人衆の一人（火打ち）が西次郎を迎えに行く。

僧「オーン ソーウ ソーウ ソーウ」

西次郎は、東次郎と同じ服装で、扇子を右の腰に差し、長刀を左手に立て保持し、登場する。舞台へ上がって東次郎と同じ所作をするが、東次郎とは逆で、左から始まり、長刀は左に廻し、向きは西向き、腰に取るのも右手で取る。西次郎は西の悪魔祓いをする。

振り終ると、

僧「神妙」

西次郎は退場し、籠所へ戻る。

僧「福太郎ー オーン ソーウ ソーウ ソーウ」

暫くして、

僧「オーン ソーウ ソーウ ソーウ」

火打ち役がコツボネを迎えに行く。

僧「オーン ソーウ ソーウ ソーウ」

コツボネは、木で作った鍬を右肩に担いで素襖姿で出て来て、大松明のところで深く一礼した後、摺り足で進んで舞台（近年設置）へ上がり、中央よりやや前で止まる。鍬を担いだまま直立の姿勢で一言一言、力強く言う。

コツボネ「あっぱれ所や 好い所

年明け 春来たり

農事近うなったり

山王七社の御穀田に

薬師仏の御奉供田

御台衆の寄り田 耕田の

打って参らしょう

好い地は 一打ち打てば

いいの香のす

二打ち打てば酒の香のす

三打ち打てばいい酒の香のす

やがて年々の吉方へ向かって

福太郎を呼んで

ひっかけ打って舞らしょう

福太郎ー」

福太郎はコツボネが登場すると大松明のところで待機する。

福太郎は、鍬を左肩に担いで素襖姿で出て来て舞台上に上り、



コツボネの右から前を廻って左に並び鍬をコツボネの鍬にカチンと当てる。

福太郎 「やあー」

コツボネ 「あっぱれ所や 好い所」

福太郎 「好い所」

コツボネ 「年明け 春来たり」

福太郎 「春来たり」

コツボネ 「農事近うなったり」

福太郎 「なったり」

コツボネ 「山王七社の御穀田に
薬師仏の御奉供田に
御台衆の寄り田耕田の
打って参らしょう」

コツボネは、鍬を担いだまま福太郎の前を左に廻ってその年の吉方（歳徳神の方角、毎年変わる）を向いて止まる。

福太郎 「我らもさらば 打って参らしょう」

福太郎は、鍬を担いだまま左に廻り、コツボネの前を通過して左に並ぶ。福太郎が止まると、コツボネは右足を半歩前に出し、鍬を右手を前に持って構える。福太郎も同時に左足を半歩前に出し、鍬を左手前に持って構える。所謂、田打ちの所作の構えをする。

コツボネ 「好い地は 一打ち打てば いいの香のす」

「いいの香のす」と言いながら鍬を振り上げると同時に右足を高く上げ、一歩踏み出し、鍬を振り下ろして田打ちの所作をする。

福太郎 「ほうとする ほうとする」

「ほうとする ほうとする」と言いながら左足を上げて踏み出すと同時に鍬を振り下ろす。コツボネの「いいの香のす」と福太郎の「ほうとする」が同時に終わる。

コツボネ 「二打ち打てば 酒の香のす」

福太郎 「ほうとする ほうとする」

コツボネ 「三打ち打てば いい酒の香のす」

福太郎 「ほうとする ほうとする」

コツボネ・福太郎は、同じ所作を3回行って後足を前足に揃える。コツボネは、鍬を右肩に担ぐ。福太郎は、左肩に担ぐ。コツボネが先に左に廻り、元の位置で正面を向いて止まる。続いて福太郎も左に廻り、コツボネの左に並んで止まる。

コツボネ 「田を打つ牛は」

福太郎 「べぼう べぼう」

コツボネ 「あっぱれ牛や 好い牛や 好い牛は一打ち打てば 三はね跳ぬる」

福太郎 「三はね跳ぬる」

コツボネ 「代はかえつ 苗代草を散りぢり花々とひろげ」

と言ってから、コツボネが先に廻り出し、続いて福太郎も廻って吉方へ向いて止まり、田打ちの時と同じように鍬を構える。

コツボネ 「大足に踏んでとう とう」

福太郎 「小足に踏んでとうとう」

田打ちと同様に鍬で打つ所作をする。コツボネが「大足に」と言ったらすぐに「小足に」と言い出し、「とうとう」が同時に終わる。

コツボネ 「大足に踏んでとうとう」

福太郎 「小足に踏んでとうとう」

コツボネ 「大足に踏んでとうとう」

福太郎 「小足に踏んでとうとう」

同じ所作を3回繰り返してから、コツボネから廻り出し、元の位置で正面を向いて止まる。

コツボネ 「苗代は ひっ下水口をふさぎ 上水口をあけ 苗代水をさらさらと」

福太郎 「心のままに」

コツボネ 「山王七社の御穀田に よし早稲の種千万石

薬師仏の御奉供田に 福萬石の種千万石

御台衆の寄り田耕田の幸々節の種千万石をずうと取って参った」

「・・・福萬石の種千万石」まで止まったままで言う。「御台衆・・・」からは廻りながら言って、「・・・取って参った」をコツボネの左で止った時に言う。続いてコツボネ・福太郎は、田打ちと同じように廻って吉方へ向いて止まる。

次に種蒔きの所作に入るため、コツボネは、鍬の刃の部分を下にして柄の刃の部分よりやや上を左手で持ち、福太郎は、鍬を同じように右手で持って種蒔きの構えをする。この時、鍬の刃先は体の方へ向ける。

コツボネ 「山王七社の御穀田によし早稲の種千萬石」

右足から一歩踏み出し、「山王七社・・・よし早稲の種千萬石」と言いながら右手で種蒔きの所作をする。

福太郎 「とーう とーう とーう」

左足から一步踏み出し、左手で種蒔きの所作をする。コツボネの「山王七社・・・よし早稲の種千萬石」と福太郎の「とーう とーう とーう」が同時に唄い終わる。以下、2人の掛け合いの場面はすべて同じ終わり方をする。

コツボネ「薬師仏の御奉供田に 福萬石の種千萬石」

福太郎 「とーう とーう とーう」

コツボネ「御台衆の寄り田耕田の 幸々節の種千萬石」

福太郎 「とーう とーう とーう」

コツボネ・福太郎は、それぞれ鍬を肩に担ぎ直して正面を向く。

コツボネ「♪春の初めの種おろし 待ちに満束せまちに千束 とずき
ますずき 寸の稲坪 石にかなめ 福太郎米かみ♪」

唄い終わると同時に、コツボネは、太鼓を一つドーンと打つ。

福太郎 「はら はらかたや」

コツボネ「農人の事なれば 鍬をまくらに昼寝をしよう」

この時、火打ち役は、舞台へゴザを敷く。コツボネは、言い終わると鍬の柄先が頭の方になるように鍬を下に置き、鍬の柄が枕になるように体の右を下にし、横向きで斜め横の体勢で寝る。

福太郎 「我らもさらば昼寝をしよう」

福太郎は、コツボネとは逆の位置に鍬を置き、体の左を下にして横向きに寝て、右足をコツボネの足に絡ませる。

コツボネ「♪年好し 世好し 所好し 年由し 世由し 今年由し
年よし 世よし なるわいよし 稲なる笹は 稲となる
福太郎の大ねなし♪」

コツボネの唄の文言は、寝言のようにゆっくりと唄う。ただ、「なるわいよし」から早く唄い、「稲なる笹は・・・」を唄いながら起き上って「福太郎の大ねなし」と唄って左手で福太郎の腰を打つ。福太郎は、打たれて起き上る。そして、両人は鍬を担いで元の姿勢に戻る。



福太郎 「はら はらふくれ」

コツボネ「さーらば 苗見に行こう」

コツボネ左へ廻って吉方を向く。

福太郎 「我らもさらば 苗見に行こう」

福太郎左へ廻ってコツボネの左横に並ぶ。

コツボネ「あっぱれ苗や 好い苗や いいもり苗に 植えば立ったり」
「・・・植えば立ったり」と言い終わると右足を半歩踏み出し、
左手をかざす。

福太郎 「植えば立ったり」
福太郎は、左足を半歩踏み出して右手をかざす。この後、両人
手足を戻し、左に廻って正面を向く。

コツボネ「♪飯司の早乙女千萬人 福司の早乙女千萬人
富司の早乙女千萬人 三千前に物の具をそえて
おと一う前も化粧してずーと参れ♪」
福太郎は、左へ廻って西南を向いて止まり、

福太郎 「♪飯司の早乙女千萬人 福司の早乙女千萬人
富司の早乙女千萬人 三千前に物の具をそえて
おと一う前も化粧してずーと参った♪」
「富司の早乙女千萬人」まで止まったままの姿勢で唄い、「三千
前・・・」から左へ廻りながら唄い、「・・・ずーと参った」を
唄い終わるとコツボネの左に並ぶ。

コツボネ「早乙女も参ろう 朝から苗を取ろう」
コツボネは、太鼓の位置へ進んで撥を持ち、福太郎はコツボ
ネの後ろに、他の10人は、コツボネの声に応じて舞台上上っ
て太鼓の前に集まる。コツボネは、次の唄を唄いながら太鼓を
打って拍子を取る。他の者は太鼓の拍子に合わせて唄う。

唄 「♪朝苗をと一るには一 さ一はらよ一のな一え一 ゆか一や
手一に手一ど ゆ一くよの一」

コツボネは太鼓を打つのを止めて、

コツボネ「苗は取つ 代鋤を合わせ 植えて参ろう」
コツボネは、再び太鼓を打つ。

唄 「げ一人り一人と一うん と一びんが一原田を植え一中一へか
一いれ一るな一を さ一かえ行くよの一」

コツボネ太鼓を止める。

コツボネ「西の海へかかって かきはまぐりを取って 都めぐりをしよ
う」言い終わると再び太鼓を打つ。

唄 「♪西の海一や 西の海一や
か一きはまぐり めなごの か一きはまぐり めなごの

なーるとのー わかめな
ごのー なーるとのー
わかめなごの

一何に駒にーやー 何に
駒にーやー たーづなを
ー かけてなごの たー
づなをー かけてなごの
おーぐしまを めぐるな
ごの おーぐしまを め

ぐるなごの のーりしずう めたるなごの のーりしずう めたる
なごの あまにといしやー あまにといしやー みーやこへ なび
けなごの みーやこへ なびけなごの 我れもなびかーやー 我れ
もなびかーやー 青いくもーのーたなびくーは こーのりかーやー
水晶のー たなびくーは ほしかとーいう しゅげめよいかーや♪」



以上で唄が終わる。

コツボネ「当年のお祝いこれまで」

唄い終ると一斉に舞台を降り、東次郎・西次郎は、大松明の所まで下がり、他の10人は、元の位置に戻る。

東次郎が出て来て、最初の長刀振りと同じように東を向いて振る。東次郎が振り終ると、御前（住職）・若徒は内陣へ入る。続いて西次郎が舞台上って西に向いて長刀を振る。この時に、火祭り進行係の小原さんが灯明から火種を持ち運び、日吉山王社前で白襦袢姿で松明をもって待機している若衆の松明に点火をする。

・ 火祭り

西次郎が長刀を振り終って石突きが地につくと、これを合図に大役が拍子木を打ち、同時に燃え盛る大松明を倒し、水をかけて火を消すと共に境内の照明も消す。

内陣では半鐘、双盤、太鼓を乱打し、法螺貝を吹き鳴らす。この音を合図にそれぞれの鬼に2人の手引きがつき、本堂東の浜縁から登場し、火祭りが始まる。

最初に孫鬼が右手に小鉞、左手に手松明を持って登場する。続いて祖父鬼は、右手に大鉞、左手に手松明を持ち、祖母鬼は右手に撞木、左手に手松明を持って現れる。これに続いて手拭でほお被りし、白襦袢姿で松明（普通の松明）を持った若い衆十数人出て来る。

孫鬼は、正面西の擬宝珠に上って右に廻って外陣へ入り、浜縁へ出て東の

擬宝珠へ上がり、欄干を西へ三度渡る。正面の欄干の切れ間は、手引きが掲げて渡る。西の擬宝珠に立ってから外陣へ入った時に小鉞と手松明を大役に預け、鏡餅に持ち替えて廻る。

祖父鬼・祖母鬼と松明持ちは、浜縁を東から西へ、そして外陣へ入って浜縁へと右回りに廻り、祖父鬼・祖母鬼は、孫鬼が鏡餅に持ち替えた時に、鉞・撞木・手松明を預け、それぞれ鏡餅に替える。三鬼とも鏡餅を体の前に持ち、左右に回しながら廻る。

孫鬼が三度目に西の擬宝珠へ立った時、拍子木を打ち、これを合図に鐘や双盤等の鳴り物が止む。松明持ちは、各自の松明を本堂前両脇の大天水桶に投げ入れる。火消し役は、外陣・浜縁に落ちた火に水をかけて消す。これで、総ての祭事は終わる。

(3) 「三州瀧山寺人日法会記」(蓬左文庫所蔵)の検討

天明2年(1782)当時の修正会鬼祭りをきめ細かく記録(根岸住の石原季隆記)されているもので(2)の登山後の儀礼と比較・検討してみることによって、伝承の姿・形が明らかになると思われる。

凡例

- | |
|--|
| <p>(1) 編者が加えた注記は、すべて()で示した。</p> <p>(2) 漢字の字体は新字体を用いた。</p> <p>(3) 文意の通じない箇所は(ママ)、なお疑問の残るものは(一カ)と、それぞれ右傍らに注記した。</p> <p>(4) 読みやすくするために、読点(、)を施した。また、難しい漢字については、適宜ルビを施した。</p> <p>(5) 原史料中の割注は、すべて()の中へ入れた。</p> |
|--|

(表紙)

「三州瀧山寺人日法会記」

瀧山寺人日法会記

三州額田郡滝村(御当家江創業の頃同国滝脇の城主本多伊勢守領せし地なり、今も同村下市場と云所の此の山添に高き処に伊勢守陣屋の跡とて残れり、俚俗呼て伊勢屋敷と云、見るから石罫など尋常のものに非ず、当時百姓小右衛門と云者居住す)吉祥陀羅尼山瀧山寺(天台宗にて江戸都東叡山寛永寺御末にて寺領六百十二石)御山上に神君の御宮鎮座まします、御別当を清龍院と云ふ(此山往古役の行者踏分しとて修験の僧徒往して真言宗なりけるか何のころにか断絶しぬ、其後正保年中大師の御弟子亮盛法印住職有りてより以来、当時に到る迄、百四十年法脉連続ある)

とそ) 同山に御本地堂と云ふ有、本尊薬師如来(御丈五尺余台座厨子入作不知、伝説に往古役の行者此所より西なる下流を渉る折から河上より一ツの蓮花流れ来れるを見て(下市場に渡せる御橋の下流にて今蓮花沢と云)此奥に霊場あらむと尋ね登り遥の源谷滝上と云ふ、溯に來り、錫杖を以て滝壺を探るに(滝壺四ヶ所有り一の釜二の釜三の釜どべの釜と云、行者の探りたるは

一乃釜なりとかや)薬師仏(御丈一寸八分)行者の突ける錫杖に取付けて上らせ給ふ、此仏を今の本尊の胎中に籠て共に厨子に秘て安置す、又厨子の外にも座像の同仏有り、衆人結縁のためとて安置す、是世に伝える前立仏なり、此外十二神観音勢至不動毘沙門等左右に双立あり(共に毘首鞞摩の作)此本地堂に例年正月七日の夜法会有(是を俚俗鬼祭と云)鬼の伝説末に記す、是に預かるの徒十二人、上役六人・長刀振二人・田打二人・火打二人此内にて主宰の者を横座と云、下役六人末に記す、此者共に神田六石を与え置ける、東の方へ三石五升、西の方へ二五九斗五升也、東の方五升多きハ正月六日にある^(ま)しする故とかや、先ツ前年の十一月其他十二にてたかひに饗の品々あり、同月七日に東乃かたにて饗し、同十五日に西の方にて饗す。此日神田の米にて作れる酒(醪^{とびれん}酒なり)是を酌んで祝ひ、調彩の魚肉ハこのしると云魚一程にかきりて他乃魚を用ゆることなし、本来此饗は十二人のもの己々か妻を饗ことこの権輿なり、是ハその夫正月朔日より七日まで別火を成す、その会釈とかや、妻を見て先へ行を尻つきと云ふ(今ハ此事廢せり)既に正月に至て十二人の者共朔日より七日まで同火を忌ミ潔齋を為す、六日に及んで東の方六人の許へ、西のかた六人行集りて、七日の法会の学ひを成す、此日去年作りたる濁酒を残し置取出て饗ことなり、同七日の御別当の許にて彼等を饗されこと有り、此折から饗膳の役ハ古式にて代官これを勤む(是を膳引と云ふ)尤上下の役乃座席饗膳等差等有り、且もてなしの時刻能とて彼等かたへ使を走ること七度半なりと云、半とは彼等と使と途中にて引逢ふやうに出て來るとぞ、是ハ古乃ことにして今ハ使を走ること兩度にて、七度半のことハ言葉にて述かばかり世、猶十二人のもの三鬼の役の者の外に法会の奉行と云もの二人、そのほかもろゝの役あり末に記す、さて法会の日に当て十二人のものを初として都而法会にあつかるものハ、御宮本坂の下なる谷川(俗にとゞめきと云ふ)にて垢離をとりて登山す、扨当日の黄昏ころに及んで御地堂の前なる撞桜堂乃鐘を撞く、是を度として御別当青龍院を初として五坊の衆徒(觀量院・密巖院・玉泉院・淨蓮院・常心院)共に東坂より登山して御本地に入らる、即時に青龍院堂前に着座有ると、本坂の上なる柵門の内のかた東西、太サ五寸廻りばかりに

長サ五六尺斗もあらむ女男の松を枝葉共に損せぬように伐採てる、その松の末の端に穴を明け、藤かつらを通して六七斗の横木を詰付、是を牛木と号て東西に一本宛双置（是ハ正月六日に松迎とて山にて伐出し、期のことく、拵て本坂五十五段の下なる東西に建置、今日此ところへ上る也）其傍に大なる幣帛一本宛有るを一本に郷民六人宛懸りて東西目を見合て、同音に御祝ひと云ふて一時に立る、其下に殿原と云ふもの二人（麻上下着用）居て平伏す（これ御祝ひと云へるの会釈とかや、此幣こときに立るとハ云ひなから東乃かたを少シはやく立る古式とぞ）立終ると火打ちの役人として二人（縺子模様尾長鳥棧留縞帶手掛^(杖カ)）着服す（この帶手掛^(杖カ)と云へるものハ頭に纏ふて下ける赤色の細布なり、申樂の狂言にみる婦女の頭に似たり）このものとも東西へ別れて石鎌を以て幣帛へ清めの火を打懸る、又同所の東西に大松を立終る清龍院を初として衆徒残らす内陣に入て、仏前にて勤行誦経等あり（薬師の真言、不動の真言）なりとかや（この勤行洛陽叡領の坊中無動寺にのみ有て、他にあることなし、故有て此御寺に襲ひ修す）この勤行のいとまに御本堂の後に鎮座有る山王社の広まゑの砂上にて長刀を振ること有り、長刀振と云ふもの二人（黒天鶯絨胴服、赤地金襴股引）着服す、是に下役とて六人（素袍を着し、小結烏帽子也）後見として随従す、長刀二振（無銘然とも先年その職のもの研て見て一振ハ小鍛冶宗匠、一振は波平行安なりと云々けるとそ）振初乃とき扇ぬきて後見に渡し、社に向て長刀を載き夫より長刀を車輪に振り後より前へ廻して取り、力石を踏こと両度、その後横に走りながら振ること両三度なり東西と号して一人ハ右へ振り、一人ハ左に振る、振ること兩人にて両度なり、振り終てまた神君御宮の広まへ乃砂上にても振る、振ること山王社前の如し、振終て御本地堂の前なる籠所へ退く（長刀振りハ無言にて囃せる鳴村もなし）猶仏前の勤行いまた終らぬ中に衆徒一人煎りたる五穀を五ツ包ミわけ器に入れ、小さき幣を取添へ承仕待なと召具して堂前の西のかたに有る朱のまがき籬^{まがき}のもとへ持行き（方六尺四方斗に囲て内に大石有り）これを鬼矢来と号、（俚俗の説にむかし同国鳳来寺にも鬼面ありけるに、鳳来寺領乃郷民と瀧山寺領の郷民と集りて、たかひに鬼面の靈なるを争い、ひたすら瀧山寺乃かたハ靈なしと云けるに、瀧山寺のかた憤りて、しからハ^マ爾^マ曾肉と喰ふて此面を冠らむやと云へば、鳳来寺のかた心得しとて其ことくして面を冠りぬきて攪^マに口す、さればこそ見よや仏罰のゆへにたちまち鬼に成たるハとて、皆々集り此処へ埋んと云えば、渠悲んで詫けるを皆云ふ、尔埋^マらて後その墳乃上に煎りたる五穀を蒔んその五穀乃芽を出すときに出よと欺て終に土中に埋しとかや、又一説に往古此瀧山乃あたりハ魔所にして魑魅人民を悩せし

ゆへ捕て土中に埋しと云々、二説いつれか実なるを知らすなから神秘の伝説誣へからすといへともおもふに、此所函谷にして山嵐瘴疫の氣盛に独陰乃地なるかゆへ、いにしへより専追儼乃遺風を行ふなるへし、しはらく誦文を護持して後五ツ包乃物を悉く籬の内へれ終り、幣を立て猶器の内に別に包=ざる五穀の有るとも籬の内へ蒔るゝ也(此五穀と蒔くこと正月朔日、四日、七日と都而三度也)その修法の間承仕侍ども螺貝をふき続ける也、修法終えて衆徒内陣に帰座して、猶一同に行道なと有り、内陣の勤行終て後御別当堂前へ出らるゝ、此時参詣の警固として下役六人杖やうの長きものを持て(是を金剛杖と云、櫛乃杖なり)東西へ分て二列に蹲踞さす(外に法会勤るものゝ非常を奉行するものとして、二人麻上下にて出る、是を殿原と号すとかや)暫有て衆徒の内觀量院(留守居の役僧)御別当の座せる後なる賽銭箱乃上にあかり鉦の緒に取付て、立なから大声を發して西東次郎そうゝと呼ふ、呼ども答す、すこし間をおきて、又そうゝそうと呼ふ、然すれとも答す又すこし間をおきて此度ハ一調高くそうゝそうと呼とき其聲に應ふして籠所より長刀を持出、御本地堂の正面の階下乃広庭の砂上にて振る(右に振る也)振終ると觀量院声をしつめて神妙と云ふ、云ゝ終ると退て籠所=入、しはらく有りて、又觀量院声を發て、西東次郎そうゝと呼ふ、呼こと前のことく三度にして、また壺人籠所より長刀を持出て振る(此度のものハ左に振るなり、此振やう、装束等山王社前にて勤たるかことし)振終ると觀量院神妙と云ふこと前のことし、云ゝ終ると退て籠所に入(或説に西次郎東次郎 □ 兩人なり、わけて呼へきを言葉のつゞきあしき故、混して西東次郎と呼とぞ)其後又觀量院声を發て、福太郎そうゝと三度呼こと、西東次郎のことし、呼終ると福太郎なるもの鍬をかたけて(此鍬ハ柄を黒塗にして、鍬の先ハ銀にてだミたるもの也)籠所より出て階下に来る(是を田打と云、装束火打乃役と同じ)堂の正面に向いて曰

年明け、春來り(農時近う)のふときちかふなったり、山王七社(御穀田)のミこくてん(仏)薬師(仏)とけ(御奉供田)のこぶくてん、み(御台衆)たい(審田耕田)し(打)う(參)乃よりてんかうてん(打)のう(參)つてまいらせう、よい(良い地)ぢ(打)ハ(打)う(打)ち(打)う(打)て(打)ハ(打)い(打)ゝ(打)乃(香)かの、二(打)タ(打)う(打)ち(打)う(打)て(打)ば(酒)さ(香)け(香)のかの、三(打)う(打)ち(打)う(打)て(打)ハ(打)ゐ(打)ゝ(打)さ(打)け(打)のかの、や(打)か(打)て(打)と(打)し(打)ゝ(打)の(向)き(年々)つ(吉方)ほう(向)へむ(向)か(向)つて

福太郎と呼んで、ひ(打)つ(打)か(打)け(打)う(打)つて(打)まいらせう、福太郎と呼ふその時同し出立のもの鍬をかたけて、ヤアと答て籠所より出て来る(初め出たる名ハこつぼめと云ゝ、後に出たるハ福太郎なり、伝説にこつぼめハ親也 □ 也、福太郎ハ子也弟也と両説なり、いつれか是なるを不知、又異説に後に出たるハ福太郎、先に出たるものハ別名あれとも、いとむかしきゆへ、古より二人ともに福太郎と呼ひ来れりとぞ)二人立双て、こ

つぼめ日

(こつぼめ) あっはれ所や、よい所、年明春来り(農時)のふとき(近)ちかふなったり、山王七社の(御穀田)みこくてん薬師(仏)ほとけの(御奉供田)こふくてん、みたいしうのよりにてんかうてんのうつてまいらせう

(福太郎云)

われらもさらばうつてまいらせう

(かく云) なから前なるこつほめを一へん廻り、もとの所へ立ツ)

こ よ(良)ひ(地)ぢ(打)ハ(打)ー(打)う(打)ち(打)う(打)て(打)ハ(打)い(打)の(香)かの

福 ほ(う)ふとするゝ

こ 二(打)タ(打)う(打)ち(打)う(打)て(打)ば(酒)さ(香)けの(香)かの

福 ほ(う)ふとするゝ

こ 三(う)う(う)ち(う)う(う)て(う)ば(いい)あ(酒)ゝ(香)さ(香)けの(香)かの

福 ほ(う)ふとするゝ

こ 田(打)を(打)う(打)つ(打)牛(打)ハ

福 べ(う)ぼうゝ

こ あ(良)っ(良)は(良)れ(良)牛(良)や、よ(良)ひ(良)牛(良)や、一(打)う(打)ち(打)う(打)て(打)ば(打)三(打)は(打)ね(打)は(打)ぬ(打)る

福 三(踏)は(踏)ね(踏)は(踏)ぬ(踏)る

こ しろ(う)ハ(う)か(う)多(う)つ、苗代草をば(散)ち(散)りゝはなゝとひろけ大足(踏)ふ(踏)んと(踏)と(踏)ふ(踏)ゝ

福 小足(踏)に(踏)ふ(踏)んと(踏)と(踏)ふ(踏)ふ(踏)ゝ

こ 大足(踏)に(踏)ふ(踏)んと(踏)と(踏)ふ(踏)ふ(踏)ゝ

福 小足(踏)に(踏)踏(踏)んと(踏)と(踏)ふ(踏)ふ(踏)ゝ

こ 大足(踏)に(踏)ふ(踏)んと(踏)と(踏)ふ(踏)ふ(踏)ゝ

福 小足(踏)に(踏)ふ(踏)んと(踏)と(踏)ふ(踏)ふ(踏)ゝ (こゝまで福太郎前乃ことく廻りて立ツ)

こ 苗代ハしつ下(水)み(水)な口をふさき、上(水)ミ(水)な口をあけ、苗代水(水)をさうゝと

福 心のまゝ

こ 山王七社の(御穀田)みこくてんに、よし(早稲)わ(種)せのたね千万石、薬師(御奉供)仏乃(御奉供)こふく(御奉供)てんに(福)ふ(種)く(種)まん(種)こく(種)のたね千万石、み(御台衆)たい(寄田)し(寄田)う(寄田)のよりにてんかうてん(奉)にかうゝふ(奉)しのたね千万石、すいと取てまいれ

福 山王七社の(御穀田)みこくてんに、よし(早稲)わ(種)せのたね千万石、薬師(御奉供)仏乃(御奉供)こふく(御奉供)てんに(福)ふ(種)く(種)まん(種)こく(種)のたね千万石、ミ(御台衆)たい(寄田)し(寄田)う(寄田)乃よりにてんかうてん(奉)にかうゝふ(奉)しのたね千万石、すいと取て(奉)まい(奉)った (と云て此所にて又廻る)

こ 山王七社の(御穀田)みこくてんに、よし(早稲)わ(種)せのたね千万石

福 とふぶゝ

こ 薬師仏の(御奉 供 田)こふくてんに、よしわせの(早稲)たね(種)千万石

福 とふぶゝ

こ はるのはしめ(春)の(始)たね(種)おろし、まちに(万 束)まんぞく、せまちに(千 束)せんぞく、
とずき(斗 換)、ますずき(寸)、すん(寸)のいな(種 粒)つぼ、石にかなめ、福太郎米かめ、
はらあゝふくれ(腹)、農人のことなれハ、鋤を枕に昼寝をせう(年)、としよ
し(世)、よよし、所よし、としよし、よよし、ことし(今 年)よし、としよし、
よよし、なりわいよし、稲なるさ(笹)ゝハ稲となる、福太郎の大ねなし
福 はらあゝかたや(腹) (又廻る)

此所筵一枚の上に兩人とも寝る、こつぼめさきへ起て福太郎を起す所作あり

こ 苗見(行こう)にゆかふ

福 われ(我)もさらは苗見(行こう)にゆかふ

こ あっはれ苗や、よひ苗やいゝもり(苗)なえ(植え)にうゑば立り

福 うゑ(植え)ば立たり

こ い(飯 塚)ゝつかの早乙女千万人、ふく(福 塚)つかの早乙女千万人、とみ(富 塚)つかの早
乙女千万人、三千まいも物の(具)ぐ添て、おとふま(前)ゑも(化粧)けせうして、
ずいと取て(参)まいれ

福 い(飯 塚)ゝつかの早乙女千万人、ふく(福 塚)つかの早乙女千万人、とみ(富 塚)つかの
早乙女千万人、三千まいも物の(具)ぐ添て、おとふま(前)へも(化粧)けせうして、
ずいと取て(参)まいった (と云て又廻る)

こ 早乙女か参ッたら、朝アから苗を(取)とろと云ふて、こつぼめなるもの
階下に有る太鼓を打てうたひ出すと長刀もてるものに、下役に
都而

十二人一所へこそり集りて一同にうたふ

うた 朝苗取るはさ(苗)ワらよのなゑ(苗)、いかやてにての、ゆく(苗)のよ

辞 苗ハ取たで白鋤あわせて、う(植)ゑ(参)てまいらせう

うた けんりんり(栄)ィん、とうとんびんから、田アをう(植え)ゑ(参)、なかへかゑれ
よ、なも(栄)ざか(行)ゆく(世)よの

辞 西の海へかゝって、か(牡 蠣 蛤)きはまくりを取て、都めくりをせう

うた 西のうみやゝ、かきはまくりめなごのゝ、何こまにやゝ(駒)、たつな
をかけてなごのゝ(阿波)、あわのなるとの(鳴門)、わかめなごの、おふぐしまめ
くるなごのゝ、のりしつめたるなごの、あま人とへや(都)ゝとへ(都)なび
けなごのゝ、われもなひかよゝ、あをい雲のたなひくハこふのり
かよ、すいせうのたなびくハほしかとよ、しげめゆひかよ

辞 当年乃御祝ひこれまで

この二人乃昔声所作まで大凡ワサヲキとも云か、むねなり、うたも辞も

風土の方言多クして聞知かたきことのミうたハまたく催馬楽と聞ゆ、予此者との云へる祝辞うたなどこまやかに誌さんとおもえとも、能くむしかたることのなし、よてかすゝの人をたのめて猶法会の主宰たる（横座の一なり）八郎左衛門と云へる百姓当年にて七十有余才、法会にあつかること四十年なりとそ、此ものにたより尋しに、神秘とていにしへより其徒の外他に伝えることを禁すればとて、かたく許さりしを、ふかくたのみ、ひたすら歎ければよふやくに心とけて語り聞せぬ、

斯して田打終ると観量院又神妙云ふ、云々終ると田打ち退て籠所に入ると、ひとしく御別当を初め急て退座ある、此時堂内にて拍子木を打ツ、是を度として二堆の大松明に手桶の水を打かけ、一時に消す、消ゆると堂内より郷民百人ばかり（縹絆着素足也）手毎に小き松明をとほし連て、堂内にて鬼を追出し追廻す、追出すに應して螺半鐘太鼓を乱調に打立る、又鬼の先へ郷民壺人大なる錫杖を振出て踊り歩行く（この錫杖ハ役の行者の持たるとて、重サ米俵目有り）さて鬼の役ハ三人なり所謂祖父鬼「鏝を持、これを親面と云ふ」祖母鬼「鉄杖を持是を姥面と云ふ」孫鬼（鏝を持、是を孫面と云ふ、三鬼共に装束猩々緋胴服黒天鷲絨股引着す）子鬼の面ハ前に記せし鳳来寺の者に冠らせて土中に埋たりとぞ、三ツの面（作毘首猩摩）これを面とはいへとも、いつれも鬼の頭なり、空頂なるものにこなたの首をさし入て冠りなり、祖父鬼・祖母鬼ハ例年籠所役人承仕と云て鐘など撞くことを司る、松田大隅・中根丹波と云へる二人のもの勤む、孫鬼ハ地下のものとして郷民ある召仕のものなど年々代りて勤む、しかれとも（召仕なども他領のものにハ許さず）祖父鬼・祖母鬼にハ手引とて郷民二三人ツゝ附添て廻る、孫鬼をハ郷民三人はかりにて木偶を遣ふことくして堂の内外あるハ廻りに建る、欄干など走らす三鬼のうち祖父鬼・祖母鬼ハ追ものも共に、堂内を三遍外トの階上を三遍、都而六遍廻るなり、孫鬼ハ是に一遍半多く都て七へん半廻る也、其のち三鬼走りて御本地仏の前に飾られる備餅（中に六ツ重ね左右に四ツ宛都て十四なり）上なる三ツを手毎に一つ宛奪ひ取て堂内を走る（この手毎に奪ひし餅ハ三鬼のもの己々の方へ持帰る也）されば堂内に輝ける炬火ハ星のことくして夥しく、人声ハ貝鉦に和て喧し（是にも火を消す、役民ありてあたりに落散たる火を消して廻る）果にはこの松明を残らず堂内の真中へ投する、投終ると傍らより手桶の水を打灌き悉く消せば、鉦鼓乃音も止ミ闇夜となりて法会終んぬ

鬼を追ふ 法乃灯や 山笑ふ

此書恐失法会之実故以国字誌芻蕘之方言干時天明二壬寅年正月東武台嶺之北根岸之邑子石原季隆於滝山下之旅泊撰之



牛木

参考資料一覧

(講座で触れた内容に関する岡崎市立中央図書館所蔵資料)

- ・請求記号「AO」の資料は棚番号64にまとまっております。
- ・パンフレット資料(請求記号「AP」「AN」)の閲覧は、1階レファレンスカウンターへお尋ねください。

○矢作神社の祭り(平成27年4月現在)

書名	著者名等	請求記号	特記事項
岡崎の観光文化百選とその周辺	大石収宏/編著	A0 233 オ	「山車とまつり」の項目で記載あり。P.109-110
尾州彫物師 瀬川治助 木彫の世界	水野耕嗣/編著	A 713 ヒ	「東中之切」「西中之切」について写真と解説あり。P.39,42,114
岡崎市文化財図録 第一集	岡崎市教育委員会/編	A0 709 オ	「東中の切」「西中の切」について写真と解説あり。P.76-77
児童画に見る 岡崎観光文化百選	「児童画に見る岡崎観光文化百選」編集委員/編	A0 293 シ	「山車とまつり」の項目に「西中之切」の記載あり。P.49
愛知の山車百輛総揃え	NHK中部ブレイズ	A 386 ア	矢作2区・3区の山車の写真の掲載あり。
矢作町二区祭礼山車	矢作町二区山車保存会/編	AP 386	祭礼山車の由来について記載あり。
新編岡崎市史 民俗 12	新編岡崎市史編集委員会/編	A0 233 オ	P.540-554

○能見神明宮の祭り(平成27年4月現在)

書名	著者名等	請求記号	特記事項
岡崎あれこれ(写真でつづる明治・大正・昭和の物語)	稲垣 弘一/編	A0 233 オ	「神明宮祭礼の山車」の項目で写真と解説あり。P.83
岡崎の観光文化百選とその周辺	大石収宏/編著	A0 233 オ	「山車とまつり」の項目で記載あり。P.109-110
尾州彫物師 瀬川治助 木彫の世界	水野耕嗣/編著	A 713 ヒ	「北之切山車」について写真と解説あり。P.40,113
岡崎三大祭 神明宮大祭	神明宮	A0 386 シ	平成19年 神明宮ガイドブック

学区再見	岡崎市立愛宕小学校/編	A0 233 カ	P. 21
神明宮の栞	神明宮の栞編集委員会/ 編	AP 173	
岡崎市史 7巻	柴田顕正/編	A0 233 オ	P. 118-123
新編岡崎市史 民俗 12	新編岡崎市史編集委員 会/編		P. 529-540
新編岡崎市史 史料. 民俗 19	新編岡崎市史編集委員 会/編	A0 233 オ	P. 224-225

○須賀神社の祭り（平成 27 年 4 月現在）

書名	著者名等	請求記号	特記事項
新編岡崎市史 額田資料編 Ⅲ（分冊）	新編岡崎市史額田資料 編編集委員会/編	A0 233 シ	「樫山の山車祭り（須賀神社大 祭）」の項目に記載あり。P. 26-28
額田町史	額田町史編集委員会/編	A0 233 ヌ	P. 995-997
ふるさと読本ぬかた	ふるさと読本『ぬかた』 編集委員会/編	A0 233 フ	P. 199

○本宿祇園祭り（平成 27 年 4 月現在）

書名	著者名等	請求記号	特記事項
岡崎あれこれ(写真でつづ る明治・大正・昭和の物語)	稲垣 弘一/編	A0 233 オ	「本宿祇園祭り」の項目で写真と 解説あり。P. 82
もとじゆく	岡崎市立本宿小学校/著	A0 233 モ	P. 74-75
本宿小史	岡崎市立本宿小学校 P T A 郷土史クラブ/編	A0 233 モ	P. 143

○悠紀齋田（平成 27 年 6 月現在）

書名	著者名等	請求記号	特記事項
大嘗祭悠紀齋田	野々山 克彦/著	A0 173 タ	
大嘗祭悠紀齋田		AP 173 タ	

ふるさと六ツ美西部	ふるさと読本編集委員会/編集	A0 233 フ	P. 126-
悠紀の里	岡崎市立六ツ美南部小学校/編	A0 233 フ	P. 114-
悠紀齋田八十周年記念誌	悠紀齋田八十周年記念誌部会/編	A0 173 ヲ	
新編岡崎市史 総集編 20	新編岡崎市史編集委員会/編	A0 233 シ	P. 410
新編岡崎市史 近代 4	新編岡崎市史編集委員会/編	A0 233 シ	P. 402-
新編岡崎市史 民俗 12	新編岡崎市史編集委員会/編	A0 233 シ	P. 278-
六ツ美村誌 [復刻版]	六ツ美村是調査会/編	A0 233 ム	P. 24-
六ツ美風土記	岡崎市立六ツ美中部小学校父母教師会/編	A0 233 ム	P. 89-
悠紀の六美	鈴木 藤作/著	A0 233 ヲ	P. 13, 18, 23
悠紀齋田記録	愛知県/編	A0 173 ヲ	
悠紀齋田記念画帖 [写・複製]	松村櫻雨/著	A0 173 ヲ	
悠紀齋田記念写真帖 [複製] 上巻	愛知県/編	A0 173 ヲ	
悠紀齋田記念写真帖 [複製] 下巻	愛知県/編	A0 173 ヲ	
悠紀齋田案内	悠紀齋田奉賛會/編	A0 173 ヲ	
御大禮並悠紀齋田に関する新聞の抜萃集録 壱		A 173 コ	
御大禮並悠紀齋田に関する新聞の抜萃集録 弐		A 173 コ	
御大禮並悠紀齋田に関する新聞の抜萃集録 参		A 173 コ	
御大禮並悠紀齋田に関する新聞の抜萃集録 四		A 173 コ	
大嘗祭悠紀齋田	岡崎市六ツ美市民センター	AP 173 タ	

御田扇祭り（平成 27 年 6 月現在）

書名	著者名等	請求記号	特記事項
皇大神宮御田扇祭 お扇 さん余話	小嶋二三夫/著	A0 386 コ	
御田扇祭り調査報告書	岡崎市教育委員会	A0 386 オ	
皇大神宮 御田扇祭	高橋町御田扇祭実行委 員会	A0 386 コ	
安城歴史研究 第 38 号	安城市歴史博物館/編	A 234 ア	P. 67-74
大和町誌	大和町誌編さん委員会/ 編	A 233 タ	P. 256-259
岡崎市美術博物館研究紀 要 第 4 号	岡崎市美術博物館/編	A0 706 オ	P. 1-38
ふるさと六ツ美西部	ふるさと読本編集委員 会/編集	A0 233 フ	P. 118-
安城市史研究 第 4 号	安城市史編さん委員会/ 編	A 234 ア	P. 33-46
新編岡崎市史 総集編 20	新編岡崎市史編集委員 会/編	A0 233 シ	P. 228
新編岡崎市史 近代 4	新編岡崎市史編集委員 会/編	A0 233 シ	P. 402-
新編岡崎市史 民俗 12	新編岡崎市史編集委員 会/編	A0 233 シ	P. 715-
新編岡崎市史 史料. 民俗 19	新編岡崎市史編集委員 会/編	A0 233 オ	P. 97-
「扇さん」あれこれ[複製]	〔岡崎氏福桶町同所三 宮神社〕/編	AP 386	
岡崎地方史話	鈴木重一/編	A0 233 オ	P. 53-56
六ツ美風土記	岡崎市立六ツ美中部小 学校父母教師会/編	A0 233 ム	P. 162-164
岡崎市史 第八巻	岡崎市役所/編	A0 233 オ	P. 202-204

○瀧山寺鬼祭り（平成 28 年 1 月現在）

書名	著者名等	請求記号	特記事項
瀧山寺 鬼まつり	鈴木智彦/著	A0 386 タ	
市政だより おかざき 平成 25 年 1～12 月	岡崎市市長公室広報広聴課/編	A0 318 シ	4/1 号 P. 2-11
岡崎・西尾の昭和 写真アルバム	樹林舎	A0 233 オ	P. 59
愛知県の伝統芸能 祭	天野光清	A 386 ア	P. 37, 38
愛知の史跡と文化財	愛知県文化財保存振興会/編	A 290 ア	P. 659
岡崎・史跡と文化財めぐり 徳川家康のふるさと	岡崎・史跡と文化財めぐり編集委員会/編	A0 233 オ	P. 229
鬼祭りと十二人衆	中根武夫/著	A0 386 オ	
岡崎・史跡と文化財めぐり 昭和 59 年改訂	岡崎・史跡と文化財めぐり編集委員会/編	A0 233 オ	P. 210
岡崎の文化財 No.2	岡崎市教育委員会/編	A0 709 オ	P. 36
郷土芸能 ぼくらでひきつごう 三河編	愛知県青少年育成県民会議 愛知県青年団協/編	A 386 キ	P. 4
月報 岡崎の教育 昭和 63 年度 No.179～190	岡崎市教育委員会/編	A0 373 ケ	No. 189 P. 4-5
伊奈森太郎先生遺稿抄	伊奈森太郎/著	A 289 イ	P. 395-400
[常磐村] 郷土誌	愛知縣額田郡常磐尋常高等小学校/編	A 233 キ	第十篇 第四章
おかざきーその周辺ー	愛知県岡崎区 B B S 会/編	A0 293 オ	P. 109
岡崎市史 第八巻	岡崎市役所/編	A0 233 オ	P. 215-227
尾三文化史談 上巻	愛知県教育会/編	A 201 ヒ	第 4 輯 15-16
郷土の祭	愛知県小中学校長会/編	A 386 キ	P. 42-43
岡崎の観光文化百選とその周辺	大石収宏/編著	A0 233 オ	P. 176-178
写真展「瀧山寺鬼まつり」	鈴木智彦/撮影	AC 293	絵葉書
岡崎の観光えはがき	岡崎商工会議所	AC 293	絵葉書
三州瀧山寺眞景繪葉書		AC 293	絵葉書
修正会の地方化と鬼の変	山崎一司/著	AP 386	「民俗芸能研究 第 35 号」抜刷

容 愛知県平野部の「鬼祭り」・「はだか祭り」を中心に			
春を呼ぶ 瀧山寺の鬼祭り	三河朝日会 ASA 岡崎ブック／発行	AP 386	
民俗藝術 第参卷 第貳號	小寺融吉／編	AP 380	「三河修正會の鬼祭」
自然と健康 3月号 日本の祭シリーズー滝山寺鬼まつりー	日本カイロプラクティック師会広報部／発行	AP 386	

○山中八幡宮デンデンガッサリ（平成28年1月現在）

書名	著者名等	請求記号	特記事項
愛知県の民俗芸能 愛知県民俗芸能緊急調査報告書	愛知県教育委員会／編	A 386 ア	P. 103-108
「岡崎学ー岡崎を考える」／「岡崎学特別講座」講演録 第6回	岡崎大学懇話会／編	AO 379 オ	P. 32-40
三河国額田郡誌	千秋社	AO 233 ミ	P. 592-598
三河国額田郡誌 全	額田郡教育会／編	AO 233 ミ	P. 592-598
続・岡崎の観光文化 その1	大石収宏／編著	AO 233 オ	P. 189-190
岡崎市史 第六卷 領土編	岡崎市役所／編	AO 233 オ	P. 97-102
新編岡崎市史 20 総集編	新編岡崎市史編集委員会／編集	AO 233 シ	
新編岡崎市史 12 民俗	新編岡崎市史編集委員会／編集	AO 233 シ	P. 735-756
新編岡崎市史 19 史料. 民俗	新編岡崎市史編集委員会／編集	AO 233 シ	P. 302-305
岡崎の歴史	岡崎の歴史編集委員会／編	AO 233 オ	P. 161-162
岡崎地方史話	鈴木重一／編	AO 233 オ	P. 57-58
郷土館 No.1～30	岡崎地方史研究会／編	AO 050 キ	No.10 P. 2 No.14 P. 7
月報 岡崎の教育 昭和48年度～昭和51年度	岡崎市教育委員会／編	AO 373 ケ	No.11

市政だより おかざき 平成 20 年 1～12 月	岡崎市企画政策部広報課/編	A0 318 シ	2/1 号 P.10-11
市場町物語	角谷米三/編 出版者:江坂岩治郎〔岡崎市市場町総代〕	AP 233 イ	
山中八幡宮御田植祭	山中八幡宮	AP 386	P. 12
山中八幡宮御田植祭	鈴木京次/編	AP 386	
岡崎の祭りうた	岡崎市現職教育委員会 社会科部会/編	AP 386	P. 2, 12
デンデンガッサリ 岡崎舞 木 豊作祈る郷土芸能	愛知新聞切抜き・複製 (1977. 1. 1 付)	AN 386	

あ と が き

岡崎の民俗文化財を、もう一度自分の眼で確認しようと思い、歩き始めて6年程経ちます。

歩く先々で、民俗文化財の変容や継続の多様さに驚かされましたが、それぞれが抱えている困難な状況にも遭遇しました。早急に「今」を記録して広く皆さんと共有し、民俗文化財を地域の財産として価値を認め合う行動が必要だと感じていました。

むかし館講座「岡崎風土記」を開催したのは、ちょうどこのように考えていた時期でした。参加者の皆さんにひとまずは情報提供できたこと、またそれらを記録冊子としてまとめることができたのは、誠に幸いでした。熱心に受講していただいた皆さん、そして情報提供して下さった多くの方々に、厚く御礼申し上げます。

民俗文化財の調査は、地域社会と結びついた具体的な民俗資料（日々の暮らしの中で形成された習俗）の「今」を記録し、それぞれの資料の多様な姿の中から、民俗変容の過程、民俗と地域社会との関わり、事象の意味などを追究することを狙っています。そのために、「あるく・みる・きく・かんがえる」を調査の基本方針とし、岡崎の今を巡っています。

「あるく・みる・きく」とは、地域の方々の協力を仰ぎ、地域の「今」をしつかりと記録すること。調査としては、通常ここまでですが、さらに「かんがえる」と入れることで、記録を地域にフィードバックして問題を発見し、解決策を地域の方々と一緒に考え、民俗文化財のよりよい姿を共有したいと願っています。

今後ともむかし館講座を通じて、民俗文化財の情報発信を試みていく考えです。多くの情報提供をお願いします。

野本 欽也 記